
IS インフィニット・ストラトス ~ ミレニアムウォー ~

かい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～ ミレニアムウォー～

【Nコード】

N5163X

【作者名】

かい

【あらすじ】

闘いの儀から数ヶ月。平凡な生活を送っていた遊戯と城之内が謎の光に飲み込まれ、飛ばされた世界。そこはISと呼ばれる兵器が存在する世界だった

プロローグ 始まりは突然に（前書き）

遊戯王とISとのクロスです。

どろぞろ

プロローグ 始まりは突然に

闘いの儀から数ヶ月。遊戯は平凡な生活を送っていた。
ある日の放課後

「おーい、遊戯」

「城之内くん」

「今日は本田達は用事があるって言ってたし、俺たちだけで帰るか」

「そうだね」

「そういえば今度の大会には出るのか？」

「うん。小さな大会だけど自分を鍛えるのにいいかなって思って」

「もう1人の遊戯がいなくなってからお前も頑張ってるよな」

「うん。もう1人の僕に負けない決闘者になりたいんだ」

「闘いの儀でお前はもう1人の遊戯に勝ってるんだ。もう立派だぜ」

「そうかもしれないけど、自分ではまだそうは思えないんだ」

「まあ。遊戯らしいな」

2人が話していると、突然目の前が光り出した。

「なっ、なんだ!?!」

「何っ!?!」

そして、光は強くなり2人を飲み込んだ。

『うわあああああああ!?!!』

遊戯達の世界とは異なる世界。そこに存在するIS学園のアリーナ。そこに1組の男女がいた。

「いくぞ箒」

「こい!一夏」

一夏と呼ばれた少年と箒と呼ばれた少女、2人は近未来的な鎧の様な物を纏っていた。すると2人の側が光り出した。

「なんだ!?!」

「箒!離れるんだ!」

「わかつている」

2人が離れると光が消え、そこには2人の少年がいた。

「人が！」

「おい、大丈夫か！」

一夏が2人に近づいた。

「どうだ!？」

「2人とも気を失っている。俺は千冬姉や先生を呼んでくる。箒は2人を看着いてくれ」

「わかった」

一夏が人を呼びにアリーナから離れた。

「この2人は……いつたい？」

箒は2人を不思議そうに見てた。

「1人は小学生くらいか、妙な髪形だな。もう1人は高校生だろうか、柄の悪そうだな」

こうして遊戯達の新たな物語が動き始めた

プロローグ 始まりは突然に（後書き）

連載中の魔法戦隊リリカルなのはが完結したら本格的に書き始めます。

第1話 異なる世界（前書き）

今回は遊戯と城之内のISが登場します。

第1話 異なる世界

「ん……うん……」

遊戯がゆっくりと目を開けるとさっきまでいた場所とは違う場所だと気がついた。

「ここは……！城之内くん！」

「う……んんん」

遊戯の言葉で隣で寝ていた城之内も目を覚ました。

「2人とも目が覚めたな。」

振り向くとそこには黒髪の女性がいた。見た感じ二十代半ばくらいだ。

「あなたは？それに……ここは？」

「その前にお前達の名前を聞かせてもらおう」

「あ、すみません。僕は武藤遊戯です。」

「俺は城之内克也だ」

「私の名前は織斑千冬。武藤に城之内、早速だが色々聞かせても

らうぞ。お前は織斑・・・いや、私の弟がお前達が突然アリーナに現れたと私を呼んできた。これはどういう事」

「どづいう事と言われても、俺たちは下校途中だったぜ」

「お前達はどこの学校に通っているんだ」

「僕たちは童実野町の童実野高校に通っています」

「童実野町・・・童実野高校・・・どちらも聞いたことないな」

「えっ!？」

「聞いたことないってどういうこと・・・と・・・」

城之内が千冬に詰め寄ろうとしたら窓が目に入り、そこからの景色に言葉を失った。そこは自分たちがいた場所とは全く違う近未来的な物だった。

「どくだよ・・・」

「まだ言ってなかったが、ここはIS学園だ」

「IS学園?。聞いたことありません」

「IS学園を知らないだと」

「ひょっとして」

「どうしたんだ。遊戯」

「千冬さん。海馬コーポレーションやインダストリアルリユージョン社は聞いたことありませんか？」

「いや、どちらも聞いたことないな」

「やっぱり」

「どういうことだ？遊戯」

「僕たちは違う世界に来たみたいだ」

「違う世界だと！どういうだよ」

「僕たちの世界で、童実町はともかく、海馬コーポレーションとインダストリアルリユージョン社を知らないのはまずありえないでしょう」

「それならこちらの世界でISを知らないのもありえないな」

「なんなんだ。そのISってのは」

「何かのイニシャルですか？」

「ふむ。IS。正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだが、従来の兵器よりも能力が高い。そして、このIS学園はIS操縦者育成機関だ」

「なるほど、僕たちの世界には無い物ですね」

「そうだな」

2人が納得していると

「千冬姉。あの人たちは」

医務室に1人の少年が入ってきた。そして千冬は入ってきた少年の頭を出席簿で叩いた

「いつてえ」

「学校では織斑先生だ」

「すみません。織斑先生」

「えっと、その人は千冬さんの弟さんですか？」

「んっ、ああ」

「良かった。無事だったんだな」

「お前が人を呼んでくれたんだよな。あんがとよ」

「俺は織斑一夏だ。よろしくな」

「俺は城之内克也だ。こっちこそよろしくな」

「僕は武藤遊戯。僕もよろしく」

3人が自己紹介をしていると

「一夏、あの2人は」

黒い長い髪を纏めた少女が入ってきた。

「織斑くん。この人は」

「俺の事は一夏でいいぜ。こいつは俺の幼なじみの篠ノ之箒だ」

「篠ノ之箒だ。」

「箒は俺と一緒にいて、先生を連れてくるまで2人を看ていたんだ」

「そうなんだ。ありがとう」

「いや礼はいい。それにしても……君は小学生か？」

箒の言葉に遊戯は表情をキツくした。

「ちよつ、僕は高校生だよ！」

「そうなのか、すまない」

箒は遊戯に頭を下げ謝罪した。

「それはそうと、俺たちはこれからどうなるんだ？」

「ふむ、お前達は」

すると、遊戯と城之内の腕が輝きだした。

「なんだ!？」

「これはっ!？」

2人の腕にブレスレットが付いていた。遊戯のブレスレットは金色で中央に千年パズルのレリーフが彫られていた。城之内のブレスレットは黒く、中央にサイコロの1の目のマークが付いていた。

「こんなの、付けた覚えはないのに」

「まさか、IS?」

一夏の言葉に遊戯と城之内が一夏の方を向いた。

「IS、これがか?」

「だが何故2人に反応しているんだ!？」

「どっぴいっこと?」

「ISは本来女性にしか使えないんだ」

遊戯の疑問に千冬が答えた。

「でもよ、一夏がここに居るのは、ISが使えるからじゃないのか」
「織斑は例外だ。偶然ISに触れて起動させてな。世界で唯一IS
を使える男子と言われている」

「世界で唯一か、すごいな」

「あつ、ああ。それよりそれは」

『マスター認証、武藤遊戯。 个体名称を登録してください』

『マスター認証、城之内克也。 个体名称を登録してください』

「これは・・・どうすればいいんだ」

「ISに名前をつけるんだ」

「名前か、どんなのがいいかな」

2人は考えた。そして。

「決めた。名前はトイボックス」

「俺もだ。お前の名前はギャンプラーだ」

『 个体名称を登録しました。 ISを展開します』

2人は光に包まれ、 光が消えた時には遊戯は紫を基調とした、城

之内は赤と黒を基調にしたISを装着していた。

「これがIS」

「けっこうカッコイイじゃねえか」

「それが2人のISか」

「ああ。そのようだけ」

「武藤、城之内。お前達にはIS学園に通ってもらおう」

「僕たちがですか？」

「ああ」

「わかりました」

「ああ。どうせ行くあても無いしな」

「そうか。準備はこつちをしておく。今日は休んどけ」

「わかりました」

こうして遊戯と城之内のIS学園入学が決定した。

第1話 異なる世界（後書き）

次回は2人が入学します

第2話 転入(前書き)

今回は2人が転入します

第2話 転入

異世界にやってきた翌日。遊戯と城之内はIS学園の制服に着替えていた。

「昨日はいきなり大変だったな。違う世界に来ちまうなんて」

「そうだね。まあ似た様な状況になった事はあるけど」

あの後2人は千冬によって転入手続きが行われ、寮の一部屋が用意された。

「さあて、早く行こうぜ。あの人遅刻とかに厳しそうだしな」

「うん」

2人は職員室に向かい、千冬から話を聞いていた。

「お前達が転入するのは私が担任をする一年一組だ。ちなみに織斑と篠ノ乃もこのクラス」

「はい」

「わかりました」

「織斑先生。その子達ですか。例の」

「山田先生。ああそうだ」

3人の側に眼鏡を掛けたおっとりした雰囲気的女性が近づいてきた。

「はじめまして、副担任の山田真耶です」

「はじめまして。武藤遊戯です」

「城之内克也だ。いてっ」

城之内が自己紹介をしたら、千冬に出席簿で頭を叩かれた。

「城之内は目上の者への言葉遣いを覚えろ」

「すみません」

「うわゝ、痛そう」

「SHRに呼ぶから、お前達はそしたら入ってこい」

「わかりました」

「わか、りました」

そしてS H Rの時間。山田先生が教卓に立っていた。

「今日は、転入生を紹介します」

「始まったみたいだな」

「そうだね」

2人は扉の前に立っていた。

「転入生を迎える事は、獏良くんがあっただけど、こっちが転入するなんて、なんか緊張してきたね」

「そうだな。獏良もこんな感じだったんだろうな」

2人は元の世界の友人を思い出してた。

「お前達、入ってこい」

「「はい」」

千冬に呼ばれ、2人は扉に入った。
そして周囲を見渡した。

「本当に女子しかないな」

「ISは女の人しか使えないみたいだから、それが当然みたいだけ

「武藤君はちっちゃくて可愛い」

「城之内君はバカっぽいけどカッコいい！」

女子達の叫びに、2人はおもわず驚いた。

「なんか……歓迎はされてるみたいだね」

「悪口も混ぜてる感じがしたが」

「お前達。静かにしろ。2人は空いている席に座れ。一時間目はグラウンドで訓練だ。織斑は2人を案内してやれ。ISSーツは更衣室に用意してある」

「一夏くん。これからよろしく」

「挨拶は後だ。更衣室に向かうぞ」

「やっぱり織斑先生は遅刻に厳しいのか？」

「それもあるけど急がないと大変な事になる」

一夏が教室を出たのを追って2人も教室を出た。

「おい一夏。大変な事てなんだよ？」

「すぐにわかるよ」

「すぐにつて」

「いた。噂の転入生2人組！」

「織斑君と一緒に」

廊下には他のクラスの女子達が集まっていた。

「なっ、なんだ！」

「とにかく逃げるぞ！ここで捕まったら遅刻は確定だ」

「うっ、うん」

一夏が走り出したのと同時に2人も走り出した。

「あっ行っちゃっ！」

「追えええ〜」

女子達も3人を追いかけて走り出した。

「待つてよ2人共」

「急げ遊戯！」

若干遊戯が遅れたが、3人は更衣室にたどり着いた。

「ぜえ・・・ぜえ・・・なんで更衣室行くだけでこんなに疲れるんだ」

「ISが使える男が珍しいんだよ。おかげで入学してから珍獣扱いだ」

「お前も苦勞してるんだな」

「2人の転入が決まった時は嬉しかったぜ。この中に男1人はキツいからな」

「確かにこれはキツいね」

「よく女にモテる奴を羨ましく思うがこれを羨ましく思うのは無理だ」

「まあ、しばらくすれば収まるからそれまでの我慢だ。早く着替えようぜ」

「そうだな」

3人が着替え始め、ロッカーからISスーツを取り出した。

「これがISスーツ」

「ピッタリしてそうだな」

「まあ、着ると本当にピッタリだって、早く着替えないと時間が！」

「やっべ、急がねえと」

その後急いで着替え、授業開始には間に合った。

その後、グラウンドに着き他の生徒達と共に整列をしていたが、遊戯と城之内に視線が集まっていた。そこにジャージ姿の千冬がやってきた。

「よしっ、早速だが織斑とオルコット」

「はいっ」

千冬に呼ばれ、一夏と金髪縦ロールの少女が返事した。

「今回はお前達に武藤と城之内と模擬戦をしてもらう」

「えっ、お二人も専用機もお持ちで？」

「まあ、一応」

「2人はまだISを起動させて間がない。今回は2人にISの扱い方と動きに慣れてもらう意味がある」

「そうですか。自己紹介がまだでしたね。わたくしはセシリア・オルコットと申します」

「そうか。よろしくな。セシリア」

「よろしく。セシリアさん」

「ええ、それでは早速まいりましょう」

前に出た一夏の腕のガントレットとセシリアのイヤリングが輝きだし、一夏は白いIS白式、セシリアは蒼いISブルーティアーズを

起動させた。

「じゃあ僕も、トイボックス」

「いくぜ、ギャンプラー！」遊戯と城之内も自身のIS起動させた。

そして勝負が始まるうとしていた。

第2話 転入（後書き）

次回は2人の初戦闘です。

おかしな点がありましたらご指摘をお願いします

第3話 モンスターの力(前書き)

今回は遊戯達のISの能力がわかります

第3話 モンスターの力

グラウンドの上空。遊戯達はISを展開し、戦闘の準備をしていた。しかし

「あのう、遊戯さんと城之内さんのISに武装は無いのですか？」

「それが、武器がなぜか無いんだよ」

セシリアと遊戯の言葉通り、遊戯と城之内のISには武装が無く、刀剣を構えた一夏とライフルを構えたセシリアに対して丸腰になっていた。

「くっそ、武器も無いのにどうやって戦ってたよ?!?!?」

「本当だよ」

城之内の嘆きに遊戯が賛同していると

マスター。俺を使うんだ

遊戯に誰かが話しかけた

「えっ!?!?誰?」

遊戯は声の主が誰か分からず戸惑っていた。

おいおい、一緒にマリクのオシリスを倒したのを忘れたのかよお?

「マリクのオシリスって、ひょっとしてバスターブレイダー!？」

そうだ。俺だ

声の主は、遊戯のデッキのカードの一枚、バスターブレイダーだった。

「バスターブレイダー。どうして」

俺達、デュエルモンスターのカードは、カードから離れて、マスター達のISの力になれるんだ

「そうなんだ。じゃあ力を貸して。バスターブレイダー」

うむ。力を貸そう!

遊戯とバスターブレイダーの言葉で、竜破壊の剣士、バスターブレイダーの剣が出現し、遊戯のISの手に握られた。

「遊戯。その剣は？」

「城之内くん。デッキのカードの力を借りるんだ」

「カードの? 誰か力を貸してくれ!」

私を使うんだ!

「お前は誰なんだ!？」

私はマスターと最も古くから共に闘っているカードの一枚だ！ビッグ5との闘いでも側にいた

「ビッグ5て事は、炎の剣士か！」

城之内に話しかけた声の主は、決闘者の王国から共に闘ったモンスター一枚、炎の剣士だった。

「お前の力が使えるのか、だったら使わせてもらっせ！」

ISでも、共に闘おう！

城之内のISに炎の剣が握られた。

「それがお二人の装備ですか？随分と変わったデザインですわね」

「同じ剣でも、俺とは随分違うな」

「俺たちののは、ちょっと特別だから」

「織斑先生。始めてもいいですか？」

「良かろう。始め！」

「行きますわよ。一夏さん」

「ああ！」

一夏が接近し、セシリアが後方でライフルで射撃の構えになった。

「いくぜ。遊戯！」

「うん！」

遊戯と城之内は2人共接近戦の体制になった。

「はあああああつ！！」

「はあああああつ！！」

遊戯と一夏の剣が互いに激突した。

「うおおおおおおつ！！」

「おつと！」

遊戯と一夏が激突した瞬間に城之内が別方向から斬りかかり、一夏がギリギリで回避した。

「くっそく、もうちょっつ、おつと」

城之内が一夏に当てられなかったのを悔しがっていると、セシリアのライフルからの一撃が放たれ、城之内はギリギリで回避した。

「わたくしもいる事をお忘れなく」

「そういえばセシリアは銃だったな」

「見た所どちらも接近戦型。距離を取ればこちらが有利ですわ」

「ならこいつでどうだ！鎖付きブーメラン！！」

剣を持たない城之内のISの左手から鎖で繋がれたブーメランが出現し、セシリアに向けて投げ飛ばした。

「えっ！？あああああ！！」

突然の事にセシリアは回避出来ず、ブーメランが左肩に直撃した。

「どうだ！！」

「城之内くんはセシリアさんを。僕は一夏くんと」

「おう！！」

城之内はセシリア。遊戯は一夏と役割を決めた2人はそれぞれの相手とのへの接近を始めた。

「遠距離攻撃で牽制できると良いけど、そうだ。来て、ギルファアデーモン！！」

遊戯は自分のデッキから暗黒魔神ギルファアデーモンを呼び出した。

「頼むよ。ギルファアデーモン」

ひゃっはあゝ何匹でもぶち殺してやるぜゝ

「いや、殺しちゃ駄目だから」

自分のモンスターが物騒な事を言い出し、戸惑う遊戯だった。

「さすがはデーモン（悪魔）とにかくいくよ。ギルファーフレイム
！！」

ドオリアアアア！！

遊戯のISの右腕から炎の渦の様な弾丸が放たれ、一夏に襲いかか
った。

「うわああああ」

くたばったか！？

「だから殺しちゃ駄目だって。でもシールドエネルギーがあるから
大丈夫だと思うけど……」

ISには操縦者の身を守るシールドエネルギーがある事を遊戯は千
冬から聞いていたが、不安な様子だった。

「くうう、今のは効いたぜ」

爆発の中から一夏が出てきた。

「じゃあこつちもっておきを使っぜ！」

すると一夏のISの剣の形態が変化した。

「剣が変わった！」

「零落白夜。俺のとおっておきだ」

「そう。なら、いくよー!」

「うおおおおおおおつ!」

「はああああああつ!」

一夏の零落白夜と遊戯の剣が激突した。

ガキイイン!!

「くっ!」

「うわっ!」

2人は衝撃で後ずさり、一夏は遊戯より体制を立て直した。

「今だっ!」

「やばい!マシユマロンシールド!」

遊戯は左腕に自分のデッキのモンスター、マシユマロンの形をした盾を装備した。

「うわっ、なんだ!」

一夏の一撃の衝撃はマシユマロンに吸収され一夏に跳ね返され、一夏は体制を崩した。

「いけええええ!」

「うわあああああ！！」

遊戯の剣の一撃が一夏に直撃し、一夏は静かに降下した。

「負けたぜ。強いな。遊戯」

「偶然だよ。次は負けるかもしれないよ」

「はあっ！」

「おっと！あぶねえ」

セシリアのライフルの猛攻を城之内は回避していた。しかし全てを完全に避け切れてるわけではなく、一部がかすり、城之内のシールドエネルギーを徐々に減らしていた。

「随分と耐えますわね。なら、これはどうです！」

セシリアのISから二機のビットが射出された。

「なっ！なんだっ！？」

「これは避けられるかしら」

「あああああああつ!!」

城之内のISの両手から発せられた光弾がセシリアに直撃した

「やべっ、やりすぎたかな？」

「まだですね。ブルーティアーズは後四機ありまして」

セシリアのIS四機のビットが射出された。

「まだ残ってたのかよ〜！」

「……………任せろ

「任せろって」

「……………あの兵器の動きはわかる……………」

「本当かよ!?!」

「……………あの兵器は……………使っている間は自分が動けない
ようだ

「そうなのか？サイコショッカー」

左斜め下前方

「えっ？」

サイコショッカーが言った角度からビットの攻撃が来た。

「マジかよ!?!」

「……………言っただろ……………わかると

「そうか。頼むぜ!」

城之内はセシリアへの接近を開始した。

右斜め後方

「くっ!」

右斜め下

「よっと」

真上

「おっと」

サイコシヨッカーが指示した方向からのビットの攻撃を城之内は全て回避した。

「そんな!全て避けた!」

「もう一度いくぜ!炎の剣士!」

セシリアに接近した城之内は再び炎の剣士の剣を出現させた。

「闘気炎斬剣！！」

「あああああああつ！！！」

城之内の剣の一撃を受けたセシリアは降下した。

「勝ったぜ！」

「まさかあの攻撃を全て避けられてしまうなんて」

「いやあ、あれは危なかったぜ」

「一夏くんのおきもすごかったよ」

「俺は遊戯の柔らかい盾に驚いたぜ」

「盾が柔らかいのですか？」

「ああ。びっくりしたぜ」

「わたくしは城之内さんの炎が飛び出す剣に驚きましたわ」

「セシリアのあの兵器に俺はびっくりしたぜ」

「あれには俺もびっくりしたぜ」

「一夏もセシリアと闘ったのか」

「まあな。あの時も零落白夜を使って負けたんだよな」

「一夏さんの零落白夜もすごい威力だったよ」

「あれは使っているとシールドエネルギーを消費する諸刃の剣なんだよ」

「そうなんだ」

「ああ。けど次は負けねえぜ」

「僕も負けないよ」

「俺もな」

「わたくしもですわ」

こうして4人は打ち解けた

第4話 一夏達とモンスター達の邂逅(前書き)

今回は一夏達とモンスター達が出会います

第4話 一夏達とモンスター達の邂逅

IS学園初日の授業後、部屋に戻った遊戯と城之内はモンスター達と話していた。

遊戯「まさかみんなとこうして話せる時が来るなんて思わなかったよ」

私達は常にマスター達の姿を見ていました

この世界に来た当初からな

遊戯が話していたのは、模擬戦の時に自分に話しかけたバスターブレイダーと自分のエースカードであるブラックマジシャンである

「だったら何ですぐに出てこなかったの？」

この世界に来たばかりで混乱している所に私達が出てきたらさらに混乱してしまうと考えたのです

「そうなんだ。違う世界に来たのはびっくりしてるけど、こうしてみんなと話せるのは嬉しいよ」

そうか。そう言われると嬉しい

遊戯の言葉を聞き、姿を表していないモンスター達も嬉しく思っていた。

「にしてもびっくりしたぜ。いきなり遊戯がカードの力を使うんだとか言ってきたて、まさか炎の剣士が出てくるなんてよ」

マスターはまだISの操作に慣れてないから、遠近両方で闘える私が最初に出てきたのだ

城之内のデッキは血の気が多いモンスターが多いからな、それらを抑えるのが大変だったぜ

城之内が話しているのは、炎の剣士と、自身のデッキのエースカードの一枚であるレッドアイズブラックドラゴンである。ちなみにこの場に出てきている他の3体が持ち主をマスターと呼ぶのに対し、レッドアイズだけ城之内と呼び捨てなのは、彼なりの友情の表し方である

「やっぱりそういう奴が多いのか」

ああ。ワイバーンの戦士にアックスレイダー、ガルーザス、ロケット戦士にリトルウイングガード、伝説のフィッツシャーマンにパンサーウォーリアーが闘いに向かおうと揉めていたのだ

「あいつらか……」

私とサイコショットカーが闘っている間はギルフォード・ザ・ライトニングとギア・フリードが抑えていたのだ

「そうか。大変なんだな」

2人がモンスター達と楽しそうに話しているとドアがノックされ、遊戯がドアを開けると一夏、箒、セシリアの3人が部屋に入ってきた。

「お邪魔するぜ」

「お忙しかったですか」

「いきなりで悪いな」

「いやっ、大丈夫だよ」

「そうです……か……」

セシリアが部屋に入った瞬間、動きが止まった。

「どうしたんだよ。セシリ……ア」

「いったいなに……が」

一夏と箒と動きが止まった。その理由は……

「なっ、なあ遊戯に城之内……そいつらは？」

「私の目が確かなら……龍がいるように見えるのだが」

「剣を持っている方達もいらっしやいますが……」

一夏達には実体化したブラックマジシャン達が見えたのだ。

「お前等、こいつ等が見えるのか!？」

「あっ、ああ。そいつらは?。」

私はブラックマジシャン。私達は簡単に説明すれば、カードに宿ったモンスターなのです

「カードに?。」

ブラックマジシャンの説明を3人が理解できず、箸が口にした。

確認だが、この世界にデュエルモンスターはありますか?

「デュエルモンスターズ?・・・確か小学校や中学校の知り合いでやってる奴がいたな」

「私も・・・聞いた事あるくらいだ」

「まっして下さい!今・・・この世界と・・・もじゃ」

今あなたが考えている通り、マスター達は違う世界からやって来たのです。一夏殿と篝殿はマスター達がこの世界にやってくる瞬間を目撃しているはずです

「あの時のか」

私達はマスター達が元の世界で使っていたデッキのカードのモンスターで、カードを離れマスター達のISの力になれるのです

「では、城之内さんの剣や遠距離攻撃も、そのモンスター達が?。」

あの剣は私の物だ

「あなたは？」

私は炎の剣士という

「そつだ。出て来いよ。サイコシヨッカー」

城之内に呼ばれ、サイコシヨッカーが姿を表した。

「こいつはサイコシヨッカーって言うんだ」

………よろしく

「こちらは炎の剣士さんとは随分雰囲気違いますわね」

「模擬戦での遠距離攻撃はサイコシヨッカーのな。セシリアのピットの動きも全部サイコシヨッカーが読んでたんだぜ」

「そつなんですか」

「てことは、俺が遊戯と闘った時に出した武器もモンスターのなのか？」

「うん。僕が使った剣はこのバスターブレイダーのなんだ」

よろしくな。一夏

「こつちこそよろしくなバスターブレイダー」

「そういえば一夏。どうして俺達の所に来たんだ？」

「あつ、そうだった。今から食堂で2人の歓迎会するから呼びに来たんだつた」

「そうか。ならすぐに向かおうぜ」

「でもさ。呼びに来るだけなら3人も来る必要無いんじゃないかな」

「それが、2人が付いてくるって言ってきたな」

「そういえば、さつきから2人ともやけに一夏にくっ付いてないか」

城之内の言葉と共に遊戯と城之内のカードが光り出した。すると

一夏お前女にモテてるんだな

マスターは女にモテないから不思議な光景だな

若いとほいいのう。こうして女を落とせるんじゃないからのう

ワイバーンの戦士とアックスレイダーとキングス・ナイトが一夏に絡んでいた。

「キングス・ナイト？……」

「こらあああ！アックスレイダー！俺がモテないのは余計なお世話だ！」

マスター。俺達は一夏達と打ち解けよう

「だからって俺がモテないの言う事はねえだろ！」

城之内は自身のモンスターにツッコんでいた。

「ギルファアードーモンの時も思ったけど、モンスターで、色んな性格があるんだね」

普段はあんなのもいますが、戦闘では頼りになりますので

「まあ。みんな個性があって良いと思うよ」

幻滅されないで助かります。お前達。マスター達が歓迎会に行くのに、それでは行けないだろう

それもそうだな

ブラックマジシャンの言葉で3体とも一夏から離れた。

「それでは参りましょうか」

「そうだな。行こうぜ遊戯」

「うん」

一夏。今度一緒に酒でも飲むかばい

「俺未成年なので」

全員が部屋を出て食堂に向かった。

「織斑君クラス代表就任おめでとーう」

その後、一夏のクラス代表就任の祝いと

「武藤君、城之内君、これからよろしくね」

遊戯と城之内君ね歓迎会が行われた。

「そつえば遊戯。さっきのモンスター達は」

一夏が遊戯に小声で話しかけた。

「みんなカードに戻ってるみたいだよ」

「そつか。モンスターにも色んな奴がいるよな」

「僕もさっき知ったよ」

「そつえば模擬戦で俺の攻撃を弾いたのもモンスターなのか？」

「うん。あれはマシユマロンてモンスターなんだ」

「そいつや他のモンスターにも会ってみたいぜ」

一夏と遊戯が楽しそうに話している中、城之内は歓迎会で出された料理を食べていた。すると1人の女子生徒が話しかけた。

「話題の新入生のインタビューに来ました！ 新聞部副部長二年の黛薫子です！」

「先輩ですか」

「そういう事。それじゃあ早速話題の転入生武藤遊戯君と城之内克也君にインタビューです！これから自分達に向けて一言！」

「えっと、とりあえずみんなと打ち解けられるよう頑張ります！」

「俺は今までと変わらず、精一杯やっていくぜ！」

「はいっ。ありがとうございます！それじゃあみんなで写真を撮ろうか」

その後クラスのみんなで写真撮り、歓迎会を終え、同時に遊戯と城之内のIS学園初日は終了した。

第4話 一夏達とモンスター達の邂逅（後書き）

次回はあの人が登場します

第5話 セカンド幼なじみ転校(前書き)

今回は鈴が登場します。そして新しいモンスターが登場します

第5話 セカンド幼なじみ転校

歓迎会の翌日の朝、遊戯と城之内が登校するとクラスの女子達が騒がしかった。

「おはよう」

「おう、おはよう遊戯、城之内」

遊戯達は集まっていた一夏、箒、セシリアの元に集まった。

「なんの騒ぎだ？」

「ああ。なんでも隣のクラスに中国の代表候補生が転校してくるらしい」

城之内の質問に箒が応えた。

「代表候補生？なんだそりゃ」

「代表候補生というのは簡単に言いますと国の代表というものですわ。私もイギリスの代表候補生ですわ。」

「そうなんだ。みんなは気にならないの」

「自分のクラスに来るわけじゃないし、俺は来月のクラス対抗戦があるからそんなに気にしてる場合じゃないんだ」

「クラス対抗戦？なんなのそれ？」

「クラスの代表同士で勝負するんだよ。それで1組から俺が出る事になってな」

「そうなんだ。一夏くんは自信あるの」

「それが、あんまり自信が無くてな。箒とセシリアに特訓に付き合ってもらってたんだ」

「ひよつとして、2人共一夏といっしょなりたいのか？」

「私は、以前より一夏が弱くなっているのが気に入らんのだ！」

「わたくしは、クラス代表としてしっかりしてもらいたいのです」

城之内の言葉に2人が反論するが、それが照れ隠しなのは明らかだった。

「そうだ。2人も特訓に付き合ってくれるか」

「特訓かああ」

一夏の提案に2人は考えた。

2人共まだISの能力を完全に理解してなく、自分達のISの能力を理解し、なおかつ自分達の訓練にもなると考えていた。

「そうだね。僕達の訓練にもなるしね」

「どうせ出るなら勝ってもらわないとな」

すると遊戯達のデッキからブラックマジシャンと炎の剣士が出てきた。

私は剣を教える事は出来ませんが、弟子を持っているので、教える方を理解しています

剣なら私や他にも使う者が多くいるから力になれる

「みんなも協力してくれるみたいだよ」

「そっか。なんかそいつら頼りになりそうだな」

一夏の言葉を聞いて筈が不機嫌な表情になった。

「一夏。それは私が頼りにならないという意味か？」

「いつ、いやっ、別にそういう意味で言ったんじゃない」

「貴様、私が教えるのだから、優勝してみせろ」

「そうだな。どうせなら優勝してもらわないとな」

城之内がそう言った直後

「残念だけど、二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝てないから」

一組の教室にツインテールの可愛らしい少女が入ってきた。

「お前……鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。フメイシンイン 久しぶりね、一夏！」

「お前のせいだ」

「あなたのせいですわ」

「お前のせいだ」

「なんでだよ……」

昼休みの直後、箒とセシリアと城之内が一夏に文句を言った。箒とセシリアは先程の一夏の知り合いらしき少女が気になり授業に集中できず、城之内は先程の少女をネタに一夏をどういじろうかを考えて授業を全く聞かなかつたため数回の注意を千冬の出席簿を受けた。

「まあ、話は飯を食いながら聞くから食堂に行こうぜ」

「まっ、まあ腹が減ってるしな」

「で、どういう関係なんだ。一夏？」

「そうですね。いい加減教えてくれませんか？一夏さん」

「一夏、ひよつとしてお前の彼女か」

「おっ、落ち着けよ2人とも、城之内も別にそんなんじゃないよ！」

「……そんなはつきり否定しなくても」

「どうしたの？……？」

食堂で一夏は箒とセシリアと城之内に詰め寄られ、城之内の質問を否定すると鈴音と言われる少女が何かつぶやくのを遊戯が見ていた。すると遊戯のデッキが光りだした。

クリッ

「えっ！？何こいつら」

「クリボー、マシユマロン」

遊戯のデッキからクリボーとマシユマロンが出てきて鈴音に近づいた。

「遊戯。そいつらもお前のデッキのモンスターなのか」

「うん。クリボーとマシユマロン。ちなみに模擬戦で一夏くんの攻撃を防いだのもマシユマロンなんだ」

箒の疑問に遊戯が答えた。

「そうか。こいつが」

「なんというか……他のモンスター達と違って……可愛らしいですわね」

「そうね。可愛いわね」

一夏はマシユマロンの頭を撫で、鈴音はクリボーの頬に触れていた。

「クリボーに懐かれたみたいだね。鈴音さんは」

「鈴でいいわよ」

「そう。じゃあよろしくね鈴」

「そういえば2人の名前を聞いてなかったわね」

「僕は武藤遊戯」

「俺は城之内克也だ」

「で、結局そいつは一夏のなんなんだ」

遊戯は鈴にモンスター達の事を説明し、その後、鈴が自分と一夏の関係話を話した。鈴は一夏が小学生の頃に、箒と入れ違いで転校してきたらしい。一夏曰わく『セカンド幼なじみ』ということだった。

第5話 セカンド幼なじみ転校（後書き）

次回も新しいモンスターが登場します

第6話 特訓と心の変化（前書き）

今回も新モンスターを登場させました

第6話 特訓と心の変化

放課後、遊戯達が一夏の特訓のためアリーナにいた。しかし、そこで問題が起きていた。それは……

「今回は俺が暴れる！」

「いいや俺だ！」

「俺が暴れる！」

「僕だよ！」

「僕に闘わせてよっ！」

「俺じゃあー！」

「俺だ！」

城之内のモンスター、ワイバーンの戦士、パンサーウォーリアー、アックスウォーリアー、ロケット戦士、リトル・ウインガード、伝説のフィッシュヤーマン、ガルーザスが自分が暴れるともめていた。

「まったくあいつ等は」

「大変だね。城之内くん」

城之内のデッキは血の気が多いモンスターが多いですから。こうなりますね

現在遊戯達はその様子を見ており、遊戯のデッキからはエルフの剣士が出現しており、遊戯の訓練にはデッキのモンスターの話し合いでエルフの剣士が参加するのが決まっていた。

みんな喧嘩っ早いからね。こっやって騒ぐのもデッキじゃ珍しくないんだよ

すると一夏の隣に小さなドラゴンがいた。

「お前はっ！？」

「ベビードラゴン」

おいらはベビードラゴン。よろしくね。一夏兄ちゃん

「あっ、ああよろしくなベビードラゴン」

「ベビードラゴンはその中に加わらないのか？」

無茶言わないでよ篤姉ちゃん。おいら弱い方なんだから

一夏達が話している、更にエスカレートしていた。

だいたいパンサーウォーリアーは4ツ星で一番攻撃力が高いからって偉そうなんだよ！

なんだとっ！

ワイバーンの戦士の言うとおりだ！別のモンスター生贄にしな

や攻撃できないくせによ！

ワイバーンの戦士の言葉にアックスレイダーが賛同した。

そんなのはスケープゴートで補えるんだよ！お前らなんて攻撃力が並で何の能力も無いじゃねえか！

なんだとっ！もう一辺言ってみろ！

事実だろうが！お前らより攻撃力が低いリトルウインガードやロケット戦士だつて効果でそれなりに約にたつんだぞ！ベビードラゴンだつて時の魔術師と融合して強くなれるしよ

俺だつてベビードラゴンと融合できるわい！

だいたい俺達よりランドスターの戦士が役にたたないだろう！攻撃力500で通常モンスターでしかも効果付きでチューナーの共闘するランドスターの戦士が登場してるしよ！

俺達の時代にチューナーもシンクロもねえ！

3体が言い争っていると新たなモンスターが加わった。

ふあああゝ。まったく。みんなが僕の悪口を言ってるから起きちゃったよ

ランドスターの戦士。起きたのか

「あのランドスターの戦士という方は寝ていたのですか？」

うん。ランドスターはめんどくさがりで、普段は寝てる事が多いんだ

「本当にいろんなモンスターがいるんだね」

遊戯達はモンスターの個性に驚いていた。

お前たち。今回の特訓に参加するモンスターを決めるんじゃないか
ったのか

フィッシャーマンが仲裁に入ろうとするが……

お前は黙ってる！

そうだ！お前がこの中で一番デッキとのの相性が悪いんだ！

仲裁に入ろうとしたフィッシャーマンに暴言を吐くパンサーウォー
リアーとアックスレイダー！

上等だ！お前らまとめてぶっ潰してやる！

フィッシャーマンもモリを構えて戦闘態勢に入った。

闘うんだったら俺も混ぜろ！

僕もやるよ！

最後まで残ったのが今回の特訓に参加するでいいじゃん！

様子を見ていたガルーザス、ロケット戦士、リトルウィングガードま

で加わるうとしていた。

「おい城之内、遊戯止めた方がいいだろう」

「止めないと大変な事になるかもしれないぞ」

「そっ、そうだな。おいお前ら」

黙ってる！ てて ！

マスターである城之内にまで暴言を吐くしまつである。

「これ止めようが無いよ」

いくぞおおおおお！！！！

モンスター達の激突は避けられないと誰もが思った……その時……

ライトニングサンダー！！

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアッ！！！！！！

落雷が落ち、モンスター達に直撃した。

まったく。当初の目的を忘れて争うとするとは、マスター達に迷惑だろう

落雷を落としたのは城之内のデッキのモンスター、ギルフォード・

ザ・ライトニングだった。

マスター。今回の特訓は私が参加しましょう

「あつ、ああ」

「だがあいつ等は放っておいていいのか……」

箒の視線の先には落雷を受け倒れたモンスター達がいた。

あいつ等はやられ慣れている。放っておいて大丈夫だ

「薄情だなお前」

一夏よ。戦いではささいな傷など放っておく余裕は無い。私も一度消し炭になった

「消し炭って、大変だな」

「あの〜」

なんだ？

「一人……やられ方が違う方がいらっしやるのですが……」

セシリアの視線の先には、なんとか立ち上がるうとするモンスター達と……まったく動けないフィッシャーマンがいた。

……あいつは水属性だから、雷のダメージが大きかった

のだろう

「あの方はさすがに問題なのは」

「……………弱点に対する特訓になったと思えばいい！

「開き直った！」

「自分の失敗を認めない気だ！」

「なあ。お前ってそんな性格だったのか」

まさかの開き直りの一夏と遊戯は驚き、城之内は呆然としていた。

さあ。今回の特訓は私が参加する

ギルフォード・ザ・ライトニングが指揮って特訓を始めようとしていた。

「……………」

そんな中セシリアはフィッシャーマンが心配な様子だった。

「少しお待ちください」

セシリアがフィッシャーマンに近づいた。

「大丈夫ですかフィッシャーマンさん」

「……………俺は……………心配ない……………」

「ですが……」

「俺のせいで……特訓に時間を減らすわけにはいかない……」

「わかりました。お気をつけて」

セシリアは一夏達のもとに戻り特訓を始めた。

特訓を始めてすぐに騒動に参加しなかったモンスターにより負傷者の回収が始まった。

大丈夫かあフィッシャーマン

……

……？フィッシャーマン？

ギア・フリードの問いかけにフィッシャーマンは答えず、訓練をしている一夏達を見ていた。

……女神だ

……えっ？

この時、フィッシャーマンの心の変化に気づく者は誰もいなかった。

訓練後、一夏を夕食に誘いに遊戯と城之内が一夏と箒の部屋に向かっていた。
すると……

「最つつつ低！ 女の子との約束を覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ぬ！」

「えっ？」

何故かポストンバックを持って激怒した表情の鈴が部屋から出てきて走り去っていった。

「一夏」

「おっ、おうなんだ箒」

「馬に蹴られて死ぬ」

遊戯と城之内が部屋を覗くと呆れた表情の箒と、状況がよくわかっていない表情の一夏がいた。

「……一夏くん」

「何があっただ？」

第6話 特訓と心の変化（後書き）

感想よろしくお願いします

第7話 勘違いされた約束と襲撃（前書き）

上手く長くできません

第7話 勘違いされた約束と襲撃

一夏と鈴の騒動から一週間、一夏と鈴の仲が険悪のまま、遊戯と城之内は事情を知っているであろう筈に聞いてみた。

「鈴が一夏と子供の頃に一夏に『料理の腕が上がったら毎日酢豚を作る』と約束したようなのだが」

筈の言葉を聞いて二人はすぐにその意味を理解した。

「ええ〜と、それって……」

「遠回しな告白だよな」

「ああ。だが、あるうことが一夏はその約束を忘れていてな。しかも『奢る』って解釈をしてしまったんだ……」

「うわあ〜」

「それは一夏が悪いな」

事情を聞いて二人は呆れていた。

呆れていたのは二人だけでは無かった。

鈍感も行き過ぎると大変だな

悪い奴では無いのだろうが、女心がわからないのだな

バスターブレイダーとブラックマジシャンが出てきて二人も一夏に

呆れた様子だった。

人の事を言えないじゃないですか

そんな中遊戯のデッキの中で誰かが呟いた。

箒から事情を聞いた翌日

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！ この朴念仁！ 間抜け！ アホ！ 馬鹿はアンタよ！」

特訓のためにアリーナを訪れ、そのビットに鈴がやってきて、口喧嘩に発展し、そして

「うるさい、貧乳」

ドガアアンツ！！！

爆発音が起こり、その衝撃で部屋がかすかに揺れた。見ると鈴の右腕にISが展開されていた。

「い、言ったわね……言っってはならない事を、言ったわね！」

その時の鈴の雰囲気には明らかな怒りと殺意があった。

「い、いや、悪い。　　今のは俺が悪かった。　　すまん」

「今の『は』！？今の『も』よ！」

鈴の言葉に

「今の『も』だな」

「今の『も』だね」

遊戯と城之内の賛同し一夏を責める。

「お前らも、なんでだよ!?!」

相手の気持ちができるようになれ

「バスターブレイダーまで!」

「ちょっとは手加減してあげようかと思っただけど、どうやら死にたらしいわね……。いいわよ。希望通りにしてあげる。全力で叩きのめしてあげる!!」

最後に鈴は怒鳴りながらビットを出て行った。

鈴が拳を向けていた方の壁を見ると直径30センチ程のクレーターが出来ていた。

そして城之内が口を開いた。

「……………一夏」

「なっ、なんだ……………」

「……………骨は拾ってやる」

「なっ、勝手に殺すなよ！」

夜、鈴は寮の廊下を歩いていった。

「全く……約束を忘れるどころが、貧乳って」

鈴が一夏の事を怒っていると

クリッ

「あっ、あなた」

「クリボーも心配してるんだよ」

遊戯と城之内がやってきた。

「部屋に来る？話くらいは聞けるけど」

遊戯と城之内の部屋、鈴を椅子に座らせ、2人はベッドに座った。

「あんた達さ、誰か好きになつた事である？」

「うーん、鈴みたいに誰かを好きになつた事は無いね」

「ダチの手助けをした事はあるけどな」

「そうなの。何をしたの」

鈴の言葉に城之内は興味津々だった。

「ゲーム屋やつてる遊戯の遊戯のじいちゃんに相談してな、まっ白なジグソーパズルにラブレター書いて相手の机の中に入れたな」

「文は僕が書いたんだけどね」

「それで、どうなったの？」

「まあ、色々あつて不発に終わつちまつたて、結局直接告白してフラれちまつた」

「フラれちゃつたんだ」

「そのダチが今度は俺の妹に惚れてて大変なんだよな」

「あんた妹がいるんだ」

「まあな」

「けどその友達は告白して通じてだけましじゃない。こっちは告白同然の約束をして、それを忘れて、しかも奢るて勘違いしてんのよ」

「まあ。それは確かに気の毒だね」

「これからも一夏はあんな感じかもな」

「だいたい一夏はねえ……」

その後も鈴はしばらく一夏に関する愚痴を話し、2人とクリボーもそれを聞いていた。

「ふう〜、色々愚痴ったら少しは気が楽になったわ。ありがとう。それじゃあ」

クリクリ〜

鈴は手を振り部屋を出て、クリボーも手を振った。

「大丈夫かな〜、一夏くん」

「気が楽になったって言ってたけど、一夏を完全に許したわけじゃないさそうだしな」

今回は一夏の奴が全ての怒りを受けるしかなさそうだな

「レッドアイズ！いつの間に!？」

ついさっきだ。一夏が怒りを受け入れなきゃ、あれは収まりそうにない

「確かにそれしかなさそうだな」

その後2人は一夏と鈴の心配をしつつ眠りについた。

数日後、クラス対抗戦が始まり、一回戦で一夏と鈴が激突した。

鈴音のIS『甲龍（シエンロンノこうりゅう）』は一夏の『白式』と同じ接近戦型である。

大型の青竜刀『双天牙月』を構え、一夏を見つめる。

「行くわよ、一夏!」

「望むところだ!」

一夏と鈴音の戦いが始まる。

開始早々、鈴音の両肩の衝撃砲『龍砲』により、一夏が追い込まれていく。

。そして、一夏は雪片式型』を握り締め、『瞬時加速』と呼ばれる技能を使つての奇襲攻撃を行った。

「うおおおおっ！！」

雪片式型の刃が鈴に届きそうな時だった。

ドガアアアアッ！！

その時、空から突然アリーナに直撃した。その姿は紛れもないISだが、『全身装甲』の異形だった。

第7話 勘違いされた約束と襲撃（後書き）

感想よろしくお願いします

第8話 ISに力を（前書き）

内容や展開が他の作品に似てしまっています

今回はあとがきに報告があります

第8話 ISに力を

謎の『フル・スキン全身装甲』のISが試合に乱入してきた事によりISアリーナに混乱が生じた。

そして、一夏と鈴音は先生たちが来るまで敵ISを食い止めると言い出した。

遊戯達はモニターで突然現れた全身装甲を見ていた。

「おい、あれはなんなんだ？あれもISなのか？」

「いいえ、違いますわ。あんなものが作られたという話は聞いたことがありませんわ。」

セシリアが説明すると、遊戯達は急いでアリーナに向かおうとするが、ISアリーナの遮断シールドがレベル4に設定され、扉が全てロックされているために救援に向かうことが出来なかった。

「（どうすればいい。僕も城之内くんもシステムを弄ってどうにかすることは出来ない）」

「どづしたらいいんだ」

遊戯達が助けに行く方法を考えていると。

「……………私に任せろ

「サイコショッカー？」

城之内のデッキからサイコシヨッカーが出現した。

「……………私が扉を解析して破る方法を見つける

「ホントか！行くぞ遊戯、セシリア」

「うん」

「えっ、ええ」

遊戯と城之内とセシリアの三人はアリーナに向かおうとすると、千冬がそれを止めた。

「待て、お前たち三人でどうにか出来るわけない。ここは大人しく部隊が来るのを待っている。」「待ってたらその間に二人が負けるかもしれない」

「頼む！行かせてくれ！」

二人の言葉に千冬は。

「いいだろう。ただし無茶をするな」

「わかりました。いこう」

「けれど、どうやって扉を破るのですか」

「今サイコシヨッカーが破る方法を探している」

……解析は完了した

解析を完了したサイコショッカーが出てきた。

「待ってたぜ！」

「どつしたら破れるの」

……ガイアとロケット戦士なら破れる

「ガイアとロケット戦士」

「そうか。やるぞ遊戯！」

「うん。来て暗黒騎士ガイア！」

「来い！ロケット戦士！」

ISを展開した二人がそれぞれモンスターを呼び出した。

遊戯が呼び出したのは馬に跨る暗黒の騎士ガイア。城之内が呼び出したのは無敵のロケットモードに変形する、先日の特訓の騒動でギルフォード・ザ・ライトニングの落雷を受けたモンスターの一体であるロケット戦士である

「いくよ、ガイア」

「頼んだぜ、ロケット戦士」

かしこまりました

いづくよ

遊戯の右腕にガイアの突撃槍が装備され城之内の右腕がロケットになった。

「螺旋槍殺（スパイラルシェイバーアア！！）」

・・・今です。遊戯が突いたポイントを

「おうっ！ロケット戦士、射出！！」

遊戯が突いたポイントに城之内がロケットを射出し、扉を破壊した。

「よっしゃあ、待ってるよ一夏、鈴」

破壊した扉から三人はアリーナに向かった。

「くっ」

一夏と鈴音は敵ISSの攻撃を回避し続けていた。そんな中、一夏は敵ISSの姿や行動から、人間ではなく、機械で動いているとわかった。すると、敵ISSが一夏に向かって攻撃をしようとした。

「しまった！！」

「一夏っ!!」

一夏は防御が間に合わず攻撃を喰らいそうになった瞬間、

「畏カード、聖なるバリアミラーフォース!!」

一夏の前に光るバリアが出現し敵ISの攻撃を跳ね返した。

「今のって？」

「間に合った」

「大丈夫が一夏、鈴！」

「遊戯、城之内、セシリア来てくれたのか」

「うん。それで、あのISは」

「わからない。わかるのはあいつが無人という事だけだ」

「そんな、ISは人が乗って使える者です。無人だなんて」

セシリアは半信半疑だった。

「わかるか？サイコショッカー」

「……………すぐに解析を始める」

サイコショッカーが出てきて敵ISの解析を始めた。

……サーチスタート

「どうだ」

……あれから生命反応はありません……無人です

「そう。なら遠慮なく戦えるね」

「けどどうする？一夏と鈴はもうシールドエネルギーが少ないだろうし、訓練を受けたセシリアはともかく、俺達はISに乗り始めたばかりだ。勝てるかどうか」

「うん。せめて時間を稼げれば、部隊が来てくれるはず」

すると遊戯のデッキからブラックマジシャンが出現した。

イチかバチかの賭けになりますが方法があります

「ブラックマジシャン」

「なんなの方法で」

マスター達のカードの力を一夏殿達のISに使うのです

「出来るのかよ、そんな事」

上手くいくかはわかりません。ですが他に方法は

「やるっぜ」

「一夏くん！」

「他に方法は無いんだろ。だったらやろうぜ」

「一夏の言うとおりね。やりましょ」

「わかった。やろう城之内くん」

「ああ。いくぜ！」

「魔法カード、カオスの儀式！。このカードで白式にカオス・ソルジャーの力を！」

遊戯が魔法カードを発動させると白式の手には剣と盾が装備された。遊戯が呼び出したのは決闘者の王国の孔雀舞とのデュエルにおいて、追い詰められた遊戯を勝利に導いたモンスター、カオス・ソルジャーである

「これが、モンスターの力」

私はカオス・ソルジャー。力を貸そう

「頼むぜ。サイコショッカー！アックスレイダー！」

城之内がモンスターを呼び出し、セシリアは見た目は変わらないがサイコショッカーの力が宿り、鈴は双天牙月とは別に斧が装備された。

「お願いしますね。サイコショッカーさん」

………任せる

俺はアックスレイダーだ！よろしく頼むぜ！

「よろしくね。いくわよ！」

「遊戯。俺達も！」

「うん。お願い、ブラックマジシャン！」

「いくぜ！レッドアイズ！」

遊戯のISにブラックマジシャンの杖が装備され、城之内のISの腕と足がレッドアイズの様になった。

「みんないくぜっ！！！」

遊戯達と敵ISの戦いが始まった

第8話 ISに力を（後書き）

サイコシヨッカーを万能にしまったかもしれない。

これから先、ISキャラとモンスター達の絡みを予定していますが、遊戯と城之内のモンスターを誰と絡ませたらいいかを募集します。それを参考にこれから先書いていこうと思います

第9話 与えられた力（前書き）

サブタイトルがいいのが思いつきません

第9話 与えられた力

遊戯と城之内のモンスターの力を借り受けた一夏達は敵ISに向かつていった。

「いきますわよ、サイコショットカーさん！」

………うむ

サイコショットカーの力を借り受けたセシリアはライフルからサイコショットカーのエネルギーボールに似たビームを放ち、敵ISに直撃した。

「まだですわー!!」

………コントロールは私に任せろ

ブルーティアーズからビットが射出されサイコショットカーが操作し、セシリアが城之内との模擬戦で見せた以上の軽快な動きで敵ISを襲った。

「続くわよ！アクセスレイダー!!」

「おつよー!!」

鈴がセシリアのビットで身動きが取れなくなった敵ISに双天牙月を投げつけ、さらに斧を握り、敵ISに叩きつけた。

「おつよー!!」

しかしダメージが小さく、敵ISはすぐに鈴に攻撃の体制をとった。

「やばっ」

「危ない！マジカル・シルク・ハット！！」

敵ISの前にシルクハットが出現し、中に鈴を入れ、4つに分身した。

「シルクハット！？」

敵ISは自身の目の前のシルクハットに攻撃した

「遊戯！鈴が！！」

「ふう〜、びっくりした」

敵ISが攻撃したのとは別のシルクハットから鈴が出てきて一夏とセシリアは仰天した。

「鈴……………」

「いつの間に……………」

「マジカル・シルク・ハットで鈴を瞬間移動させたんだ」

「助かったわ。ありがとう」

「気をつけてよ」

「わかってるわよ」

「次は俺の番だ。いくぞカオス・ソルジャー!!」

はっ

続けて一夏がカオス・ソルジャーの剣で敵ISを斬り裂いた。

「いくよ城之内くん」

「ああ。離れろ一夏!!」

「おう!!」

「ブラック・マジック
黒魔導!!!!」

「黒炎弾!!!!」

一夏が離れた瞬間に遊戯の光弾と城之内の腕からの火球が直撃し、敵ISは弱った。

「よしっ、このまま一気に」

「待って下さい。様子が変わります」

セシリアが異変に気づき、城之内を止めた。すると敵ISから糸が出てきて糸が敵ISを包み、繭になった。

「繭?.....」

「なんなんだ？」

全員が繭から離れて様子を見た。すると。

「繭が」

「割れてく」

繭から割れて中から敵ISが出てきた。その姿は先程までと変わり、背中に蛾のような羽が生え、全体の色が緑に変わっていた。遊戯と城之内はその姿から、ある物を連想した。

「グレート………モス」

グレート・モス、それは遊戯が決闘者の王国で、城之内がバトルシテイで闘ったデュエリスト、インセクター羽蛾が使ったモンスター、どちらとのデュエルにおいても使用され2人を苦しめたモンスターだ。

「何………あれ………虫？」

「なんでグレート・モスが」

「グレート・モス？知っているのか、城之内？」

するとISは上昇し、羽を動かした。

「何か来ますわ！」

「みんな上昇するんだ！」

遊戯の言葉で全員が上昇した。するとISが突風を起こし、地面を削った。

「地面が、削られちゃった」

「あれを受けたらかなりのシールドエネルギーが削られるわね」

「あれの対策を考えませんか」

セシリアが対策を考えようとした瞬間。

「一夏！」

突然、アリーナのスピーカーから箒の大声が響いた。

「箒!？」

「何してやがんだ、あいつ」

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

どうやら箒はじっとしていられなくて、中継室に乗り込み一夏に必死の声援を送りに来たらしい。だが、それが仇となる。

敵ISは箒の方に視線変えた。

「箒!！」

「キマイラ!!」

遊戯はいち早く動き、デッキの中で空中で一二のスピードを誇る有翼幻獣キマイラの力を使い、中継室の前に立ちほだかった。

「(ミラーフォースじゃみんなに跳ね返ってしまつかもしれない、それなら、ビッグ・シールド・ガードナー!!)」

遊戯は巨大な盾を出した。すると敵ISは遊戯に向けて竜巻を放った。

「くうううううううう」

敵ISの竜巻を盾で受け止めるが、盾が耐えきれず砕けた。

「うあああああああつ!!!!」

盾が砕けた遊戯は竜巻を防げず直撃を受けてしまった。

「遊戯!!」

一夏は『イグニッション・ブースト瞬時加速』と呼ばれる技能を使って落下する遊戯に近づき受け止めた。

「大丈夫か!遊戯!!」

「一夏くん……僕は大丈夫」

「私の……せいなのか」

箒は遊戯のダメージが自分のせいだと放心状態になっていた。すると敵ISは2人に向けて突風を放とうとしていた。

「このままじゃ2人が！」

「俺に任せろ！悪魔のサイコロ！！」

「サイコロ！？何に使うのよ！？」

「そうですね！ふざけてる場合では」

「いいから、いけっ！」

城之内の手に赤いサイコロが出てきて城之内が投げた。出たサイコロの目は………4

敵ISは2人に向けて突風を放つが先程のような勢いは無く弱っていた。

「弱っているのですか？」

「悪魔のサイコロでいまのあいつの力は4分の1だ！」

「あのサイコロそんな効果があんなっ！？」

「一気にいくぞっ！！」

「はいっ……！」

「衝撃砲!!」

「黒炎弾!!」

悪魔のサイコロの効果に半信半疑ながらも2人は城之内と共に遠距離攻撃で敵ISを攻撃した。

「うおおおおおっ!黒魔導(ブラックマジック!!)」

遊戯が接近し、至近距離から光弾を放ち敵ISを攻撃した。

「今だっ!一夏!!」

「うおおおおおおっ!!」

一夏は剣を振り上げ、瞬時加速で敵ISに接近した。

「カオス・ブレード!!」

一夏の剣が敵ISを叩き斬って敵ISが爆発した。
こうして乱入者との戦いは終わった。

第9話 与えられた力（後書き）

皆さんにアンケートを取りたいと思います。

アンケートの内容は、一夏を誰とくつつけるか、候補は箒、セシリア、鈴からお選び下さい。締め切りは11月末です

第10話 戦いの後（前書き）

今回は後日談で短いです。

第10話 戦いの後

敵ISから数時間後、一夏達は医務室で検査を受けた。

「どうだった遊戯」

「軽い打撲だって。安静にしてたらすぐに治るよ」

「そうか。よかった」

城之内は安堵した表情になった。

すると遊戯は城之内の後ろに箒がいる事に気づいた。

「箒さん」

「遊戯、すまなかった。私のせいで」

「いいよ。たいした怪我じゃないし」

「しかし」

すると一夏が遊戯に話しかけた。

「実はな、遊戯が検査を受けてる時に箒はブラックマジシャンに怒られたんだ」

「ブラックマジシャンに？」

「ああ」

「ブラックマジシャンに言われたのだ。『あの時、あの場にやってきた行動力は評価する。しかし、考えもなく勢いだけであの様な行動を続けていれば、いずれ誰かを取り返しつけない事態に巻き込んでしまう！』今回のマスターの負傷も、下手をすれば取り返しつけない事態になっていたかもしれない！』とな」

「ブラックマジシャン、言い過ぎじゃ」

するとデッキからブラックマジシャンが出てきた。

いいえ、マスターは優しすぎます。こういった事ははっきりと言わなければ

「ブラックマジシャンの言うとおりだ。私はそれだけの事をしたのだ」

「篝さん」

「私が愚かだった。じっとしているのが我慢できず、そのせいで前にこんな怪我を」

重い空気を変えるために、城之内が口を開いた。

「まあなんだ。対抗戦が中止になっちまったが、一夏と鈴が仲直りしたし。結果オーライにしようぜ」

「城之内さんは少し軽すぎませんか」

「確かにあんたって結構軽いわよね」

「遊戯の怪我を軽い気分で見ちゃ駄目だろ」

「お前ら〜。まあ一夏の言つとおり、遊戯の怪我を軽くみちゃ駄目だけだよ」

「城之内くんの明るい所には何度も助けられてるよ。だから気にしないで」

「遊戯」

こうして事件は解決した。

第10話 戦いの後（後書き）

次回から2巻に入って遊戯と城之内の恋人（予定）の2人が登場します

第11話 新たな転校生（前書き）

今回で2巻に突入です。今回も短いですができるだけ長くするように頑張ります

遊戯と城之内は内心呆れていた。

「男子！ 四人目の男子！」

「しかもまたうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてきて良かった〜！」

「もう、このクラスは最高！ 全く違う四人の男子が居て！！」

またクラスの女子が発狂し始めた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ、自己紹介が終わってませんから！」
千冬と真耶の制止により、とりあえず静まるのだった。

もう一人の転校生は銀髪に、黒眼帯をつけ、まるで氷のような空気を纏った『軍人』のような少女だった。

「……………」

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」どうやらその少女 ラウラは千冬のことを知っているようだった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その一言でクラスに沈黙が走る。

「(変わった雰囲気の子だな)」
遊戯が内心でそんな事を

すると、ラウラは何故か一夏を睨みつけた。
ラウラは静かな怒りを一夏に向ける。

(認めない……貴様を！)

ラウラは手を振り上げた。

クリクリ〜！！

「なっ！？なんだキサマ！！？」

クリボーがラウラの顔にしがみついた。するとクリボーはラウラの顔を離れ、一夏の机の上にとった。

クリ！クリクリ！クリ！！

クリボーがラウラに怒りを向け、ラウラもクリボーに敵意を向けた。

「おい、ラウラとか言ってたな」

城之内が立ち上がりラウラに視線を向けた。

「なんだキサマ」

「理由は知らねえがダチに手え出すってんなら俺が黙っちゃいねえぜ！」

「フン、キサマ如きが私に勝てるとても」

「僕も同じだよ」

続けて遊戯が立ち上がった。

「友達に手を出すなら僕も許さないよ」

「一人だろうと二人だろうとおなじだ」

三人はにらみ合い、すると

「貴様ら、いいかげんにしろ。」

千冬が仲介に入ると、ラウラと遊戯と城之内は黙って席についた。

「では、各人急いで第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でI S 模擬戦闘を行う。解散！」

こうしてホームルームは終わった。そして、千冬は一夏に視線を向ける。

「織斑、武藤、城之内。デュノアの面倒を見てやれ」

「君が織斑君？ 初めまして、僕は……」

「自己紹介は後だ。急ぐぞ」

「えっ？」

「すぐにわかるよ」

「またあれは勘弁だ」

「えっ、ええ？」

一夏はシャルルの手を引き、遊戯達と共に教室を出る。何故なら、このままだと教室で女子達の着替えが始まってしまっからである。

さらにもう一つ……。

「ああっ！ 転校生発見！」

「織斑君達と一緒にだ！」

恐れていたこと……早速他のクラスの女子に発見されてしまった。

このままだと質問攻めにあい、授業に遅刻してしまう。

そうなれば鬼教師こと、織斑千冬の特別カリキュラムが待つことになる。

「「「（（（それだけは絶対にヤダ！！）））「「「

だが、一夏達の思いとは裏腹に女子がどんどん集まってくる。

「いたっ！ こっちよー！」

「者ども出会え出会えい！」

「武家屋敷かよ！？」

そして、時代劇のごとくさらに女子が増える。

どうしたのだ？ブラックマジシャン

一夏に引っ張られるシャルルをブラックマジシャンは見ている。そのブラックマジシャンにジャックス・ナイトが問いかけ、キングス・ナイトが側にいた。

あのシャルルという少年だ

あの少年か

可愛らしい少年じゃが、それがどうかしたのか？

ISが女性しか動かせないのはこの世界では常識だ。男の自分が来れば注目されるのはわかっているのだろう。しかし彼は自己紹介の時から自分が注目される理由がわかっていなかった

場の勢いに圧倒されただけでは？

そうかもしれないが、城之内のデッキでも誰かが気づいてるかもしれない

あのシャルルという。少年

気づいたか

・・・妙だ

城之内のデッキでは炎の剣士、ギルフォード・ザ・ライトニング、サイコシヨッカーがブラックマジシャンと同じ考えを持っていた。

第11話 新たな転校生（後書き）

感想とアンケートが全く来なくて寂しいです。よろしく願いします

第12話 意外な特技（前書き）

今回は作者独自の設定があります

第12話 意外な特技

女子達を振り切った一夏達は更衣室にたどり着いた。

「はあ、はあ、助かった」

「これは……………何度経験しても辛いよ」

「また……………納まるのを待つしかないな」

「織斑君達は大変だったみたいだね」

「まあな。それと俺のことは一夏でいいからな」

「僕も遊戯でいいよ」

「俺は下の名前で呼ばれることは無いから城之内で呼び捨てでいいぜ」

「そう。じゃあよろしく一夏、遊戯、城之内。僕のことシャルルでいいよ」

「わかったよ。よろしくね、シャルルくん」

「そ、それはそうと早く着替えようぜ。」

「そうだな。千冬姉の授業で遅刻はまずい」

と一夏と遊戯と城之内は着替え始めるとシャルルは顔を違う方向に

向けた。

「ん？どうしたんだ？シャルル」

「えっ、何でもないよ」

「そう（どうしたんだろう、シャルルくん）」

遊戯がシャルルに対する疑問を残したまま4人は着替えを終えグラウンドに向かった。

グラウンドに全員が揃い並ぶと、千冬はセシリアと鈴を呼び出す。すると……。

「あああーっ！ど、どいてくださいっ！」

空からISを纏った真耶が制御不能で急降下してくる。
ドカーン！

一夏と激突し、土煙が舞う。土煙が止むと、遊戯と城之内は顔を赤くし、その光景から目を逸らした。どうしてそうなったのか、一夏が真耶を押し倒す形となっている。しかも、あるうことが一夏の手が真耶の豊満な胸を掴んでいる始末。

「うわっ！」「ぐ、ぐめんなさい！」

一夏は急いで真耶から離れる。その瞬間、城之内のデッキから……

おのれええっ！！俺の女神という者がいながらあああ！！

フィッシャーマンが怒りを一夏に向け、モリを構えた。

「やっ、やめるフィッシャーマン！」

止めないでくれマスター！あいつを仕留めなければ！

その後フィッシャーマンは城之内のモンスター総動員で取り押さえられた。その際に

首を洗って待ってやがれよおお！！織斑一夏あああっ！！！！

フィッシャーマンが一夏に呪いの言葉を残していった。

その後の真耶VSセシリア&鈴の模擬戦闘が行われる。しかし、二人のコンビネーションが悪く、さらに元日本代表候補生である真耶の高い実力により、結果はセシリアと鈴の大敗となってしまった。

次に、訓練機IS『打鉄』で乗り方や動かし方の訓練が始まる。専用機を持つ、一夏、遊戯、城之内、セシリア、鈴、シャルル、ラウラが教えることになる。

すると、女子達は一夏、遊戯、城之内、シャルルを目当てに集まってくるが、千冬の一喝により静まるのだった。それぞれが担当することになった数名の女子にISの動かし方を教えることになったのだが、遊戯と城之内はブラックマジシャンを始めとするモンスター

達の陰からのアドバイスでなんとか教えることができた。
そして訓練が終わり、二人は一夏にお昼と一緒に食べようかと誘われたのだったが……

屋上で昼食を食べ始めると一夏争奪戦が始まった。箒、セシリア、鈴はお手製の弁当を一夏に食べてもらおうと、奮闘している。それもあーん付きで……

「一夏くんも大変だね」

「あれで気づかないだもんなあ」

「普段からあんななんだ」

遊戯と城之内とシャルルは一夏達から少しの距離を取り弁当を食べていた。するとシャルルがあることに気づく。

「あれ、二人のお弁当、中身が同じだね」

シャルルの言葉に一夏達が二人に視線を向け、鈴が中身を覗き込む。

「ホントだ。中身が同じ」

「これは、遊戯さんが作ったのですか？」

「ううん。城之内くんが作ったんだ」

「……えええっ！！？」「」「」

遊戯の言葉に箒、セシリア、鈴が驚きの声を上げた。

「なんだよ。驚くことかよ!？」

「なんといいいますか」

「意外だな」

「人は見た目によらないのね」

三人の素直に感想を述べた。

「僕も料理が出来るて聞いた時は驚いたよ」

「俺が料理出来るのがそんなに意外か？」

「うん」「うん」「うん」

屋上にいた全員が首を縦に振った。

「何だよ!？」「だってあんたそういうの出来るように見えないもん」

「遊戯はそういうのができそうだが」

「まあ……家の事情でな、自分で作ってたんだよ。そしたら自然と上達してたんだ」

「なんか俺と同じ感じだな」

「一夏もなのか」

「俺は千冬姉と2人暮らしでな、家事は俺がやってたんだ」

「そうなのか。まあ家の事情に関してはあまり聞かないでくれ」

「そうだな。誰にでも触れられたくない部分があるからな、私はそんなに聞いたりしないぞ」

「ありがとよ。そんじゃ、みんなの弁当はどんなかな」

城之内は一夏の前にあったバスケットからサンドイッチを取り出した。

「ちょっと城之内さん！勝手に」

城之内はサンドイッチを口にした瞬間に顔を青くした。そして一夏は『しまった』と言いたそうな表情になっていた。

「……………どうしたの？城之内くん」

「……………城之内？」

「……………あんだ、どうしたのよ？」

「……………サンドイッチなのに甘い」

「……………えええっ?!?!?」「……………」

サンドイッチが甘いと聞き全員が驚いた

「サンドイッチなのに甘くてどういづことよー!」

「本を見ながら作ったら、写真の通りにならないので、本に載っていない物も入れて作りました」

「本の通りに作れば味は問題ないのに、そういえば一夏くんも」「我慢して食べてたのですか!？」

セシリアの問いかけに一夏は小さく首を縦に振った。

「あんたも不味いなら不味いてはつきりと言いなさいよ!」

「申し訳ありません! 今後はこのようなことが無いように」

「まあ、最初から完璧には誰も作れないからな。そういえば話が変わるけど、シャルルは寮の部屋は一夏と同じか?」

「男子は俺たちしかいないからな、そうなるだろうな」「なあ一つ提案なんだが、部屋を変えっこしようぜ」

「生徒同士で部屋を勝手に変えてはいけないのでは」

「後で織斑先生に許可をもらえば大丈夫だろう」

「まあ面白そうだな」

「うん」

「じゃあ決まりだな」

「完全に席替えのノリよね」

鈴は城之内の提案に呆れていた。

「じゃあジャンケンでパーとグーだけな」

「ああ」

「うん」

「うん」

「ジャンケンほん」

結果

グー 城之内 シャルル

パー 遊戯 一夏

「俺はシャルルとか。よろしくな」

「よろしくね城之内」

「よろしくな遊戯」

「よろしくね一夏くん」

放課後に千冬から許可をもらい、部屋は城之内とシャルル、一夏と

遊戯になった。

一方、城之内のデッキ内

—夏めええ〜、必ずぶち殺してやる

フィッシャーマン……お前

フィッシャーマンの暴走に呆れるワイバーンの戦士

大丈夫かな〜

フィッシャーマンを心配するリトル・ウイングガード

あいつに見せてやるぜ〜、シー・ステルススリーをな!!

いや無いだろう! マスター海関係のカードを持ってないし!

あいつに海の恐怖を味あわせてやるぜ〜

だ〜か〜ら〜!

まあ、また暴走しそうになったらギルフォードに止めてもらえばいいか

第12話 意外な特技（後書き）

父子家庭で父親があんな城之内なら料理ができるかもと考えました。アンケートと感想をよろしくお願いします

第13話 嵐の前(前書き)

アンケート状況

箒 3票

セシリア 0票

鈴 0票となっています。アンケートは11月未までなので投票をよろしく願います。

第13話 嵐の前

「ええとね、一夏がオルコットや嵐さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

一夏、遊戯、城之内シャルルの四人はISアリーナにて一夏の白式や戦い方について話し合っていた。

一方、箒達三人は一夏に教えるシャルルに嫉妬の目を向けていた。

「一夏の白式には後付武器イコライザがないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、バススロット（拡張領域）が空いてないらしい」

「一夏くんは織斑先生と同じワンオフ・アビリティー（唯一仕様の特殊才能）『零落白夜』に使用されているみたいなんだ」遊戯が説明した『零落白夜』はシールドエネルギーをコストに、雪片式型で相手のシールドを断ち切る技で、千冬曰わく、諸刃の剣である。

「姉弟だからで同じ能力を使えるのかな……？」

シャルルは腑に落ちない表情をする。

「普通はありえないことなの？」

「そりゃあ、ISとの相性によるからね」

「そうか。でもやっぱり戦いじゃ、武器が多い方が有利だよな！」

「城内、いくら武器が多くても本人が使いこなせなかったら意味がないよ」

「そ、それもそうだな」

「ISの武器数は五つ、多くても八つくらいなんだけど、僕の専用機、『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』は二十くらいあるよ」

「二十で、なんかすごいね」

「歩く火薬庫だな」「なあシャルル……まさかその武器全部使いこなしてるのか？」

「まあ大体ね」

「…………マジかよ…………」

三人は茫然とした。二十個も武器があるだけでも驚いたのに、さらにその殆どを使いこなしてると言うのだから

「二人の武器のどうなの？」

「僕達のISはカードの力が使えるから、その全てが使えるなら四十個になるかな」

「四十で…………僕の倍じゃないか。それにしても、カードの力って？」

「そっぴやシャルルにはまだ見せてなかったな」

「そういえば、この間の時はカオス・ソルジャーの力を借りたけど、サイコショットカーの力を借りれば俺も射撃ができるのか？」

「そういえばあの後カオス・ソルジャーから聞いたけど、一夏くんのISじゃ充分な力が出せなかった」

「サイコショットカーもアックスレイダーも同じ事を言ってたな」

「僕達のISじゃないと充分な力を発揮できないみたいだね」

「あの時は緊急事態だったからな。これから先も使うこともなさそうだな」

「結局カードの力てなんなの？」

「実際に見せるか」

「そうだね。射撃型じゃわかりずらいからわかりやすい装備を使おうか」

「よしっ！」

「お願い、エルフの剣士！」

「いくぜ！ギア・フリード！」

すると遊戯の手にはシンプルなデザインの手が握られ、城之内のISは右手は完全な刃に変わり、左手には盾が装備された。

「これが二人の武器」

すると二人の武装が解除され、2体のモンスターが出てきた。

私達はISを通してマスター達に力を貸しています

遊戯のISから出てきたのは、遊戯と共に古くから闘い続けた一枚であるエルフの剣士である

文字通り私達はマスター達の剣となり盾になります

城之内のISから出てきたのはバトルシティでの、インセクター羽蛾のデュエルにおいて、羽蛾の策略により追いつまなかった城之内を救い、勝利の鍵となったモンスター、鋼鉄の騎士ギア・フリードである。

うわあ、エルフの剣士は昔の戦士で雰囲気があるし、ギア・フリードは全身が鉄で覆われててかっこいいな

シャルルの無邪気な笑顔に2体は……

………

目を背けた。

「どうしたの？」

「なんか変だぞ」

………なんなんだ。この胸の高鳴りは!?

くっ……彼は……彼は男だというのに!!

「エルフの剣士？」

「おい、ギア・フリード」

……私はデッキの戻ります!

私ものです!

「ちょっと!どうしたの!? エルフの剣士! ねえ!」

「おい! ギア・フリード! おいつ!」

自分達のモンスターの謎の行動に戸惑う遊戯と城之内

「とりあえず、特訓を再開しようか」

「夏達が特訓を再開しようとする、女子達がざわめきだした。上を向くとラウラがIS『シユヴァルツェア・レーゲン』を起動させ、こちらを睨みつけている。」

「おい」

「……なんだよ」

ラウラの呼びかけに一夏が応える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

と、いきなり戦いを挑んできた。

「(あの子……なんで一夏くんを狙ってるんだらう?)」

「一夏は初対面みたいだし、なんの恨みがあるんだ」

「イヤだ。理由がねえよ」

一夏はすぐに断ったが、ラウラが逃がさなかった。

「貴様にはなくても私にはある!」

すると突然、左肩に装備された大型の実弾砲が発射された。

「ビッグ・シールド・ガードナー!!」

遊戯が盾を出現させ、実弾砲を防いだ。

「キサマ!」

「言ったよね。友達に手を出すなら許さないで」

「ならキサマもまとめて」

『その生徒! 何をやっている! 学年とクラス、出席番号を言え!』

騒ぎを聞きつけた担当の教師の声がスピーカーから響く。

「ちっ……今日は引こつ」

ラウラはISを解除し、アリーナゲートへと去っていく。

「助かったぜ。遊戯、ビッグ・シールド・ガードナー」

守るのが俺の仕事だ

「友達が襲われるのを見過ごせないよ」

「けどわかんねえな。なんであんなにあいつは一夏につきまとうんだ？」

ラウラが一夏につきまとう理由がわからず、城之内が首を傾げると

「……一つだけ、心当たりがあるんだ」

「えっ!？」

一夏の言葉に遊戯が声をあげた。

「なんなの!?! いったい」

「それは今度話すよ。みんなも疲れてるだろうし、今日はもう終わりにしようぜ」

その後、シャルル以外の三人は更衣室に向かい、着替えた。(シャルルは何故か三人と一緒に着替えるのを拒否している)

「じゃあ、俺は部屋に戻るぜ」

「あ、シャルルくんにESのことで聞き忘れたことがあるから、僕も部屋に行つていいかな？」

「ああいいぜ」

「ごめん。一夏くんは先に部屋に戻つてて」

「そうか。また後でな」

「おいシャルル。帰ってきてるか？」

城之内が部屋を開けるとシャワーの音が聞こえる

「シャワー中みたいだね」

「そうみたいだな。あっ！」

「どうしたの？」

「昨日ボディソープが切れてて、新しいの出すの忘れてた」

そう言つと城之内は棚から新しいボディソープを取り出した。

「今頃シャルルも無くて困ってるだろう。おいシャルル、新しいボディソー……」

「どうした……の」

城之内がドアを開け言葉を失い、遊戯もドアの先を見て言葉を失った。なぜなら

「じよ、城之内……遊戯……」

シャワー室から裸の少女が出てきたからだ。

第13話 嵐の前（後書き）

他のIS作品のパクリになってるかも……

第14話 明かされる正体と凡骨の怒り（前書き）

今回で城之内とシャルルにフラグが建ちます

第14話 明かされる正体と凡骨の怒り

シャワー室から裸の少女が出てきて困惑する二人

「きゃああっ!」

少女の悲鳴で正気に戻り、少女がシャルルだということ事に気づく

「シャルル……なの」

いつまで見てんのよおおおおっ!!

「ぐばあああっ!!」

「うわあああっ!!」

突然二人が吹き飛ばされる。その犯人は

まったく。女の子の裸をいつまでも見て

失礼ですね

遊戯のデッキの女性モンスター、ブラックマジシャンガールとクイーンズ・ナイトだった。

「えっと……君たちは」

早く服を着て。詳しい話を聞かせてもらつわよ

「う、うん」

その後少女はすぐに服を着て、出てきた。

その後、三人の中で長い沈黙が続く、遊戯が最初に口を開く

「シャルルくん……だよね？」

遊戯の問いかけにシャルルは小さく頷いた。

「なんで男の振りをしてたんだ？」

「それは、その……実家の方からの指示で……」

「実家からの？」

「確かシャルルの実家は、ラファール・リヴァイヴを造った。デュノア社だよな。前に説明してた」

「社長である父親の命令なんだ」

「命令で、なんか他人行儀だね」

シャルルの顔はだんだんと曇っていく。シャルルはゆっくりと口を開いた。

「僕はね。愛人との子なんだよ」シャルルの言葉に二人は絶句し、言葉を失った。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにねデュノアの家の人が来たの。それで色々と検査していくうちに」

S適正が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは話したくないであろう事を話し続け、二人もそれ聞き続けるのが辛くなってきていた。

「なあシャルル、言いたくないんだったら、無理に言わなくてもいいんだぜ」

「大丈夫だよ……このまま本当の事を言わない方が辛いし」

「父と話したのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別荘で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『この泥棒猫の娘が！』ってね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、戸惑わなかったのにな。それに腹違いの姉からは見下すような目で笑われてね。唯一の救いは、その時に弟が心配するような目で見えてくれていた事かな」

シャルルは愛想笑いをしだし、城之内は拳を握りしめていた。

「とんでもない奴らだな」

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「経営危機に！？？どうして！？？確かデュノア社は量産機ISのシェアは世界第3位だよな」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ISの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があつてやっと成り立っている所ばかりだよ。それで、フ

ランスは欧州連合の統合防衛計画から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨な事になるんだよ」

「新しい物を求めたわけだね」

「そういえば授業で第三次イグニッション・プランの次期主力機をイギリスとドイツ、イタリアのISで選定中だって言ってたな」

「うん。ただでさえ遅れに遅れての最後発だから第三世代型を作るには圧倒的にデータも時間も不足していたんだ。しかもなかなか形にならないせいで政府から予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット。その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「その、デユノア社がまずいのはわかったけど、それとシャルルの男装には何の関係も無いんじゃないのか？」

「簡単だよ、注目を浴びるための広告塔。それに、同じ男子なら日本に出現した特異ケースと接触しやすい。その使用機体と本人のデータも取れるかもってね。そう、一夏のデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕はあの人にね・・・」

「つまり、スパイって事？」

「簡単に言うとなんな所だよ。でも二人にばれちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デユノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どの道今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいい事かな」

「……………」

「ああ、何だか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘ついてごめん」

シャルルは再び愛想笑いをし、二人はそれに納得しない表情だった

「……………お前はどくなるんだよ？」

「城之内くん？」

「遅かれ早かれこの事はフランス政府にはれるだろうね、そうしたら僕は代表候補生の座を下ろされて牢屋入りとかだろうし」

「それでいいのかよ？」

「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利がないから仕方ないよ」

「ふざけんなっ！！」

「じよっ、城之内？」

城之内が立ち上がり、今までシャルルが聞いた事が無いほどの叫び声をあげた。

「父親にいいように利用されて、バレれば牢屋いき、お前はそれでいいのかよ！？いいわけねえよな！？シャルル！！！」

城之内がシャルルに近づき、シャルルは城之内の迫力に押されていた。

「城之内くん……シャルルくんが驚いてるよ」

「……はっ、すまねえ、シャルル」

遊戯に言われ、城之内はシャルルから離れた。

「……大丈夫だよ。ちょっとびっくりしたけど」

「わりーな。俺の親父もろくでもない奴なんぞでな」

「城之内の……お父さん？」

「ああ。俺の親父は無職でギャンブル好きの酒乱。借金もたっぷりの典型的な駄目親父だ」

「……とんでもないお父さんだね」

シャルルは驚愕していた。自分の身近に同じように父親に苦勞している人物がいたからだ。

「そんなんだからな、お袋にも愛想を尽かされてな。俺が十歳の時に離婚して、妹を連れて出ていった。」

「確かにそんなお父さんじゃ嫌だよな」

「それからは親父が働く気が無いから新聞配達とかのバイトをして生活費と学費を稼いでな。借金も少しずつ返してた」

「お父さんの事を嫌いになつたりはしないの？」

「あんなんでも、一応親父だからな。出来ることなら借金を全部返して仲よく暮らしたいと思ってるぜ」

「強いんだね、城之内は」

「まあな。結局お前はもうしたいんだ？」

「僕は……でもバレたからにはフランスに戻されるのは確実だし」

「ならここにいればいいだろ」

「えっ？」

「俺たちしか知らないんだろ。だったら俺たちが黙ってりゃいいだけだろ」

「城之内くんの言うとおりだよ」

それだけではない

「ブラックマジシャン」

遊戯のデッキからブラックマジシャンが出てきた。

IS学園特記事項第二一です

「特記事項二一？」

ブラックマジシャンに言われ、遊戯は生徒手帳を開いた。

「ええと……本学園における生徒はその在学中においてありとあ

らゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないモノとする……そうか！」

「こいつがあればフランス政府もデュノア社も手が出せないんだな」

「よく覚えてたね。特記事項って五十五個もあるのに」

私は書物の中身を覚えるのが得意なのです

「書物って、手帳じゃん」

「とりあえず三年間はシャルルは安全だ。どうするかはこれから考えればいい」

「そうだね。二人ともありがとう」

「シャルルが安心した表情になると」
コンコン

「えっ!?!」

ドアがノックされる音が響いた。

「遊戯、城之内、シャルル、飯食いに行かねえか」

「一夏くんだ」

「どつする、今のシャルルが見られたら女なのがバレちまつぜ」

シャルルは普段、胸の膨らみを隠すコルセットを着けているが、今は着けていなく、さらに体のラインがわかりやすいジャージを着ているため、一目で女の子だとわかってしまう。

「どうする！？一夏ならバレても大丈夫かもしんねえけど」

いや、下手に知る人間を増やさない方がいい

「そうだね。シャルルは布団の中に入って」

「う、うん」

「入っていいぜ」

「そうか。入るぜ」

一夏が部屋に入って、シャルルは布団に隠れた。

「シャルルはどうしたんだ」

「シャルルくんは具合が悪いみたいなんだ」

「ゴホッ、ゴホッ」

「そうか。大丈夫か？」

「シャルルの看病は俺がするから、二人で食ってこいよ」

「そうだな。行こうぜ遊戯」

「うん」

「俺も後でいくからな」

遊戯と一夏は部屋を出て行き、城之内は二人を見送った。

「これで安心だな」

「危なかったね」

「ああ。シャルルも腹が減ってるだろ？取りに行ってくるぜ」

「そう。ごめんね」

「気にすんなよ。そんじゃ、行ってくるぜ」

城之内も部屋から出て行き、部屋はシャルル一人になった。

「凄いな、城之内は」

あそこまで熱いマスターは久しぶりに見たな

「えっ？」

するとシャルルの周囲に炎の剣士、アックスレイダー、魔導騎士ギルティア、ガルーザス、ベビードラゴン、時の魔術師、レッドアイズブラックドラゴンが出てきた。

「君たちは？」

私達は、マスターと最も古くから共に闘っている者達です

「そうなんだ。どうしたの？いきなり出てきて」

いや、久しぶりにあんなに熱い城之内を見てな

「城之内で、普段からああいう風なの？」

マスターは見ての通り直情的で、あんまり考えない人だ

最初に炎の剣士が説明した。

デュエルも最初はそんな感じでひどかったよな

アックスレイダーの言葉に全員が賛同した。

おいらは後を考えずに出されて踏みつぶされた事があるよ

私は初めて出された時、攻撃が効かず、ミサイルで吹き飛ばされた
た

ピンチになったら運任せで僕だより

「大変なんだね……みんな」

シャルルはさっきまでしなかった苦笑いをした。

だがマスターは、ある目的のために闘い続け強くなった

「ある目的？」

シャルルは炎の剣士の言葉が気になった。

妹の目だ

「妹の目で、どういうこと!?!」

マスターの妹は生まれつき目を患っていて、医者からはいずれ失明するだろうと言われていたのです

「失明!?!」

そうです

「それで……どうしたの?」

この時はシャルルはあまり聞いてはいけないことだと理解していた。しかし、聞いてしまった。

世界で最先端の医療技術の使って手術をすれば治る見込み五分と言われていた。しかし、母親にそんな大金があるわけでもなく、当然父親にもない。だからマスターはあるデュエルの大会の賞金を手術費用に使ったために大会出場した

俺ともその大会中に出会った

「妹さんは、どうなったの?」

大会自体は遊戯が優勝したが、遊戯から賞金が譲られ手術が行われ、妹は助かった

「そうなんだ。よかった」

それ以外にもマスターは誰かのために本気になれるのです

ギルティアの言葉に、さっきの自分への言葉でシャルルは納得した。

ある男が遊戯のカードを夜の海に捨てた時には、マスターは海に飛び出して、拾いにいたりしてたな

ガルーザスの言葉にシャルルは驚いた。夜の海に飛び込むなど、危険以外の何でもないからだ。

「城之内・・・・・・・・」

この時シャルルは惹かれ始めていた。

誰かのために本気になれる熱さと優しさを持った城之内に。

第14話 明かされる正体と凡骨の怒り（後書き）

シャルルの言葉の中に出てきた姉と弟はオリジナルキャラで後に登場させる予定です

第15話 憎しみの理由（前書き）

現在の状況

箒 4票

セシリア 0票

鈴 1票となっています。締め切りまで後一週間ですので、まだの人はお願いします

第15話 憎しみの理由

シャルルを城之内に任せ、夕食を食べた遊戯は一夏と部屋にいた。

「ねえ一夏くん」

「なんだ」

「ラウラさんが一夏くんを恨んでいる理由に心当たりがあるって言うてたけど、なんなの？」

「ああ。それが」

「一夏は言うべきかと考えたが、遊戯も既に巻き込まれているので、言うべきと考えた。」

「以前俺は何者かに誘拐されたんだ」

「誘拐!?!」

「ああ。何が目的かは知らないが、俺は拘束されて真っ暗な場所に閉じ込められたんだ」

「それで、どうなったの？」

「しばらくして突然部屋に衝撃が来たんだ。そしたら壁が崩れて現れたのはISを装着した千冬姉だったんだ」

「織斑先生が？」

「その時千冬姉は第二回IS世界大会『モンド・グロツ』に出場
していて、第一回で優勝してて、誰もが二連覇を確信してい
が、俺を助けに来たことで不戦敗」

「それとラウラさんがどう関わってるの？」

「俺の誘拐事件に関しては世間的には一切公表されてないが、
その時ドイツ軍関係者が全容を大体把握していて、千冬姉は
ドイツ軍から情報で俺の居場所を突き止めて助けたんだ。その
借りがあって千冬姉は大会終了後に一年ちよつとドイツ軍IS部
隊で教官をしていたんだ」

「ひよつとしてラウラさんは」

「多分その時の教え子だ。それで千冬姉を慕ってて、大会二
連覇を邪魔した俺を恨んでいるんだ」

「でもそれは一夏くんは悪くないんじゃない？」

「あいつはそうは思っていないぜ。それにあの時俺は自分に
力が無くて悔しかった。けれど俺はあいつと戦う気はない」

「でも……」

マスター

「……みんな？」

遊戯のデッキからブラックマジシャンとバスターブレイダーが出て

きた。

マスターの気持ちはわかるが、ああいうのは厄介だぜ

バスターブレイダー……

勝利や力など、何かに執着する者は何をしでかすかわかりません。マスターもそれを見てきたはずですよ

ブラックマジシャンの言葉に思わず遊戯は納得してしまっ。今まで遊戯やもう一人の自分が闘った相手で、遊戯に勝つ為にエグゾディアのカードを海に捨てたインセクター羽蛾、決闘者の王国で追い詰められ、身を投げようとした海馬、誤解からもう一人の自分の命を狙い、卑劣から行いを続けたマリク。ドーマの闘いにおいても卑劣な行いをした羽蛾をライフポイントが0になっても攻撃を続けたもう一人の自分自身も、その全て執念や憎しみからの物だった。

あの者が何かをしでかさなければいいが
「そこが不安だね」

「シャルル〜。飯持ってきたぜ」

「ありがとう、城之内」

夕食を取りに行った城之内が戻ってきて、シャルルは扉を開けた。

「焼き魚定食にしたけど、よかったか？」

「うん、大丈夫。そっちは城之内の？」

シャルルの目線の先には井があった。

「ああ。俺は牛丼にしたぜ」

「そうなんだ」

「そんじゃ食おうぜ」

「そうだね、食べよっか。あっ！」

「どうしたんだ、シャルル……って、ああ、しまった」

定食のため、城之内は箸を持ってきてしまっていた。

「すまねえ。まだ箸に慣れてないよな、フォークとスプーンとってくるぜ」

「い、いいよ、お、おいしそうだなー。いただきます」

シャルルが慣れない手つきで箸を使おうとするが

「あっ」

ぼろっ。

「あっ、あっ……………」

ぼろっぼろっ。

上手く取れずに落としていた。

「やっぱり、フォークを取ってくるぜ」

「い、いいよ。なんとかこれで食べてみるから」

「シャルル、自分ひとりでがんばるのはいいけどよ、すこしは甘えたほうがいいぜ」

「う、うう……………」

「今までが大変だったからいきなりは難しいかもしれないけどよ、ゆっくりと慣れていこうぜ、俺や遊戯はシャルルの味方だぜ」

「城之内……………、じゃ、じゃあさ、あの……………」

「ん？やっぱり、フォークを取ってくるか？」

「そ、その……………。じよ、城之内が食べさせてほしいな」

「えっ……………？」

「ダメ……………かな？」

シャルルの上目遣いに城之内は思わず顔を赤くしてしまった。

「わ、わかった。男に二言はねえ。じゃあ、その……あーん」

シャルルは城之内の差し出した魚の身を食べ、その際にシャルルの頬は少し赤くなっていた。

「お、おいしい？」

「う、うん、おいしいよ」

「そ、そうか」

「じゃ、じゃあ、その、次はご飯がいいな」

「ご、ご飯だな、はい、あ、あーん」

「あ、あーん」

その後も城之内はシャルルに食事を食べさせ続け、城之内が牛丼を食べたのは、しばらく後だった。

その頃、城之内のデッキ内

変わった光景だな

……そうだな

城之内とシャルルのやり取りを見守っている、レッドアイズとサイコシヨッカー。

どうやらあの少女はマスターに好意を寄せ始めたらしい

そんな2体の後ろにギルフォード・ザ・ライトニング

モンスター達を全員呼ぶぞ。緊急集会を開く

これより緊急集会を開く

ギルフォードの号令により集まった城之内のモンスター達

ギルフォード、いったい何を話し合っただよ

ランドスターの剣士がめんどくさそうに聞いた。

炎の剣士を始め、殆どの者が知っているが、マスターのルームメイトであるシャルル・デュノアは実は女性であった。そしてマスターに好意を寄せ始めている。議題はその事に関してだ

マスターに彼女ができる時がくるとはな

そうだなワイバーン、マスターが妹の静香以外で親しい女は杏子と舞しかいないからな、安心だな

ワイバーンの戦士にガルーザスが賛同した。

しかしマスターはシャルルに対してそういった感情を持っていない。我々が今後これに関してどういった行動をするかが議題の内容だ

ギルフォードの言葉にレッドアイズが口を開く。

そんな物、決まってるだろ

レッドアイズの言葉に全員が頷いた。

全力で応援しよう!!!!!!

満場一致で決定だな、しかしギア・フリード、お前はいいのか？

マスターなら安心だ。しかし、彼女を傷つけるならば、たとえマスターでも叩き斬る!!!

マスターを斬るなよ.....

ギア・フリードにツッコむギルティアだった。

一方、遊戯のデッキ内では

よかったではないか。お主が惚れたのが女でな

そうですね。こんなに嬉しいことはない

それは大げさではないのか

いいではないですか。男に惚れたと思ったら、実は女の子だったのですから

まあ、こんなエルフの剣士は初めて見るな

エルフの剣士を囲む様に集まる、ジャックス・ナイト、クイーンズ・ナイト、キングス・ナイト、暗黒騎士ガイア。
私のこの思いが彼女に伝わればいいのだが

友として応援しているぞ

ジャックス・ナイト……ありがとう

頑張れよ、若いの

(だがその前に……あいつをどうにかしてほしい)

ガイアが振り向いた先には

に……私の気持ちにも気づかないで……あんな小娘

黒いオーラを出すホーリー・エルフがいた。

第16話 沈黙の力 前編（前書き）

後書きにアンケートの結果があります。最後までよろしくお願ひします

第16話 沈黙の力 前編

シャルルの一件の翌日の昼休みの屋上、そこで遊戯は

「ラウラさん、ちょっといいかな？」

「なんだキサマ……」

ラウラに話しかけていた。

「ラウラさんが一夏くんを恨む理由、聞いたよ」

「……それがどうした」

「あの一件は一夏くんは悪くないよ」

「理由はどうあれ、私は教官の経歴に泥を塗った奴を許さない」

「そんな」

「そもそもここは教官が居るべき所では無い」

「なんでそう思っの!？」

「この奴らは危機感に疎く、ISをファクションが何かと勘違いしている。その程度の奴らに時間を割かれるなど、虫唾が走る」

「それって、まるで自分と織斑先生以外の全ての人を見下してるみたいじゃないか!」

「そうだな、事実だがな」

ラウラの発言に遊戯は驚きはじめた。ここまで歪んだ考えを持っているとは思わなかったからだ

お前は何もわかっていない

「なんだと」

「ブラックマジシャン？」

お前は力の意味が理解出来ていない

「何が言いたい」

強さと暴力は違う。強き力は弱き力を守るためにある。そもそも軍とは弱き民を守るために有る物だ。それが理解できないようではお前は本当に強くなつたとは言えない

「私が劣っているとしても言うのか？」

そうだな。力の意味を理解しているマスターや城之内、それに夏殿の方が今のお前より強い

私があのような奴に

「ラウラさん、城之内くんは守る物のために強くなつたのは事実だよ」

「あいつがか。ならば私が劣っていないという事を証明してくれる」

ラウラは屋上を去っていった。

「証明で、何をする気なんだろう?」

放課後、遊戯は一夏、城之内、シャルルと一緒にいた。

「どうしたの遊戯?」

「うん。ちょっとラウラさんの事でね」

「あいつかあ、俺も一夏から聞いたぜ」

「千冬姉を慕うのはわかるけど、暴走しないか心配だな」

「僕の話もまともに聞いてくれなかったし」

「一夏!」

「ん? 等。どうしたんだ? 血相変えて……」

「今、第三EISアリーナでセシリアと鈴の二人がラウラに……」

「なんだって！」

遊戯と一夏は篝のその言葉を聞いた瞬間、立ち上がり第三アリーナに急いで向かった。

「俺たちも行くぞ！」

「うん」

「ああ」

残った三人も後を追いかけた。

二人が第三アリーナにたどり着くと、そこではラウラがセシリアと鈴の二人を痛めつけていた。

「……これがラウラさんの証明」

「遊戯！一夏！」

すると城之内たち三人もアリーナにたどり着いた。

「助けに行くぞ！」

「でもアリーナのシールドは」

「俺に任せろ」

三人はISを展開させ、一夏が零落白夜をアリーナのシールドを破り、突入した。

「その手を離せえええつ！！」

「うおおおおおつ！！」

一夏の零落白夜と城之内のパンサーウォーリアーの剣が正面から斬りかかるがラウラの寸前で止められた。

「ふん……感情的で直線的、絵に描いた様な愚図共だな」

「なんでだ？……剣振り下ろせない」

「やはり敵では無いな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では貴様等も有象無象でしかない。消えろ！！」

ラウラが動けなくなった二人に肩のレールカノンの照準を定めた瞬間

「サイレント・バーニング！！」

「くっ！？」

ラウラの側面から光弾が放たれ、それを防げずに直撃し、一夏と城之内は解放され、動けるようになった。

光弾が放たれた方向には白い杖を握った遊戯がいた。

「城之内くん、一夏くん、シャルルくん。セシリアさんと鈴をお願い」

「遊戯、大丈夫かよ」

「遊戯なら大丈夫だ。きっと遊戯なりに考えがあるんだ」

一夏はラウラと戦いそうだったが城之内の言葉で引き下がり、城之内、シャルルと共にセシリアと鈴の下に向かった。

「また貴様か、武藤遊戯」

「これがラウラさんの証明!？」

「そうだ。次は貴様と城之内克也。そして奴を倒し私の力を証明する」

「そんな事で証明される力なんて間違ってるよ!」

「ならば私と戦ってみるか」

「わかったよ、僕がそれを証明してみせるよ!」

遊戯とラウラの戦いが始まるうとしてた。

第16話 沈黙の力 前編（後書き）

アンケートの結果で一夏は筭となりました。投票した皆様ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

第17話 沈黙の力 後編

「お願い。サイレントマジシャン、サイレントソードマン！」

遊戯の両手に小さな杖と剣が握られた。

「そのような物で!!」

「はあっ!!」

ラウラの左肩のレールカノンから放たれた砲弾を遊戯は剣で弾いた。

「まだだっ!!」

「くっ」

ラウラがワイヤーブレードを射出し、遊戯のISにワイヤーが絡みつき自身に引っ張った。

「はあああっ!!」

遊戯はラウラに引っ張られた瞬間に剣を振り上げた。

「そんな小さな剣で」

遊戯がラウラに剣を振り下ろした瞬間に剣は巨大化した。

「何っ!?!」

「はあああああつ!!」

「くうううつ!!」

遊戯が振り下ろした剣をラウラはなんとかISの腕で防ぎ、直撃を回避し距離を取った。

「……剣が巨大化したと」

「サイレントソードマンは時間が経つほど力を増すんだ。そして遊戯が左手に持っていた杖も巨大化した。」

「サイレントマジシャンは自分以外のISが武器を使う度に強力になる」

「そんな武器が……あるはず」

「戦いはこれからだ！サイレントバーニング!!」

「まずいつ」

遊戯の杖から放たれた光弾をラウラは上昇して回避した。

「これで!!」

「させん!!」

遊戯も上昇して剣を振り下ろすがラウラの何かに止められた。その様子を一夏達も見ていた。

「あれは、俺と城之内もやられた」

「なんなんだあれは」

「あれはシュヴァルツエア・レーゲンの第三世代型兵器のA I Cだよ」

「なんだよそれ？」

「慣性停止能力、つまりエネルギーで空間に作用を与えて対象を任意に停止させることができるんだ」

「停止で、そんなのありかよ!？」

城之内が声を荒げてしまった。

「一対一であれを破るのは難しいよ」

「大丈夫かよ……遊戯」

ラウラがA I Cで動きを封じた遊戯に拳を打ち込もうとした。

「今度はこっちの番だ!」

「マジカル・シルクハット!」

遊戯のいたところにシルクハットが出現し、別の場所に三つの出現しラウラは目の前をシルクハットを攻撃したが中に遊戯はいなかった。

「妙な物を……」

ラウラはシルクハットの二つにレールカノンで狙いを定めた。

「これでっ!!」

ラウラがシルクハットの二つに砲撃するが中に遊戯はいなかった。

「ハズレか。残りは二つ」

ラウラが次のシルクハットに狙いを定めようとした瞬間。

「今だっ!!」

シルクハットの二つから遊戯が飛び出し、ラウラに接近した。

「サイレント・バーニング!!」

「くっ!!」

遊戯が光弾を放ちラウラがギリギリで避けた。

「(さつきもだけど、サイレント・バーニングにあれを使ってこない。使えない理由があるのかな?)」

遊戯はラウラのISの能力の事を考えていた。

「（なんなんだ奴のISは、時間が経ったり相手が武器を使ったりに強化される装備など聞いた事が無い。あのシルクハットもだ。ど
ういう仕組みになっている!?）」

ラウラは遊戯のISに困惑しつつも冷静に分析しようとしていた。

「（他にどんな妙な物があるかわからない。警戒しなくては）」

「（ラウラさんが警戒して何をしてくるかわからない。一気に決めよう!）」

ラウラが遊戯を警戒して後退したのに対して遊戯は一気に接近した。

「お願い、ブラックマジシャン! ブラックマジシヤンガール!」

遊戯の持っていた剣と杖が消え、新たに二つの杖が出現した。

「魔法カード、マジシャンズ・クロス!!!」

遊戯は二つの杖をクロスさせ、その先に光が集まった。

「なっ、なんだ!?!」

「ブラック・バーニング・マジック!!!」

「ぬおおおおっ!!!」

二つの杖から巨大な光弾が放たれ、ラウラに直撃した。

「私が……貴様などに」

ダメージを受けながらもラウラはレールカノンの照準を遊戯に定めた。

「まだやるの!？」

「私は……私は強くなければならないんだ!!!」

ラウラは遊戯に向けてレールカノンを発射しようとした瞬間

「そこまでだ!」

騒ぎを聞きつけた千冬がアリーナに駆けつけた。

「織斑先生」

「教官」

「まったく、派手に暴れたものだな。今日はここまでだ。決着は今の学年別トーナメントで付ける。いいな」

「教官が……そう仰るなら」

千冬の言葉にラウラは素直に返事をし、IS解除した。

「武藤、それに織斑と城之内にデュノアもそれでいいな?」

「は、はい」

「では学年別トーナメントまで一切の私闘を禁じる。解散！」

こうして今回の騒ぎは千冬の手で鎮圧された。

第17話 沈黙の力 後編（後書き）

最近また遊戯王を始めようかと考えていますが、この作品内でも夏達にデッキを持たせた方がいいでしょうかねえ？

もし持たせるなら誰はどんなデッキが良いと思いますか

第18話 心の闇(前書き)

後何話で二巻が終わるかわかりません

第18話 心の闇

遊戯とラウラの激突からおよそ一時間、保健室には包帯を巻かれたセシリアと鈴がベッドの上に、その側に遊戯達がいた。

「別に助けられなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなあ、誰がどう見ても危なかっただろ」

「ですから、あそこから逆転を」

「ISがあんな状態で出来るわけねえだろ」

「二人だってボロボロじゃないか」

城之内と遊戯の正論に二人は反論できなかつた。

「まあまあ二人共、二人は好きな人に格好悪い所を見られて恥ずかしいんだよ」

「ん？」

「「あ」」

シャルルの言葉の意味が一夏は意味がわからず首を傾げ、遊戯と城之内は納得した表情になり、セシリアと鈴は顔を赤くした。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人って困るわよねっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！というかお二人もそのような顔をしないでくださいっ！」

二人は顔を赤くしたままシャルルの言葉を否定し、鈴は話の内容を変えするために遊戯に振った。

「そっといえばあなたの剣と杖は初めて見るわね」

「ああ、あれは僕のデッキのサイレントソードマンとサイレントマジシャンだよ」

「その方達とはまだお会いしていませんわね」

「二人とも自分から話したりしないからね。出てきて」

遊戯が呼ぶとデッキから2体のモンスターが出てきた。

出てきたのは記憶の世界でのバクラとのデュエルにおいて遊戯が新たにデッキに加えたモンスター、サイレントソードマンとサイレントマジシャンである。

「私がサイレントソードマンLV7です」

「私がサイレントマジシャンLV8です」

「LV？」

ドアが吹き飛ばされると大量の女子達がなだれ込んできた。それと同時にサイレントソードマンとサイレントマジシャンはデッキに戻った。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたのみんな……ちよ、ちよっと落ち着いて……」

「ぼ、僕達に何か用なの？」

「と、とにかく静かにしてくれ……」

「」「これっ!」「」

女子の全員が紙を出して来て一夏がそれを読み上げた。

「今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは」

「ああ、そこまででいいから!とにかくっ!」

すると女子全員が手を差し伸ばした。

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デュノア君!」

「お願いだから組んで、武藤君」

「私と組もうよ、城之内君！」

すぐに四人は理解した。今回のトーナメントのペアで数少ない男子である四人と組むために全員が集まったのだと。

そして遊戯と城之内は同じ事を考えていた。『まずい』と。シャルルは普段男装をして正体を隠しているが、誰かとペアを組んでペア同士で特訓をすれば自然と一緒にいる時間が多く、いつ正体がバレてしまつかわらないと考えた。しかし、同じく何も知らない一夏と組ませるわけにはいかないとして、それを防ぐために城之内が動いた。

「すまねえ！、実は俺シャルルと組むんだ！」

城之内の言葉を聞き、便乗するように一夏も動いた。

「悪いな。俺も遊戯と組むから諦めてくれ」

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男どうしってのも絵になるし」

「城之内×遊戯だと思ってたけど」

「城之内×シャルルもありかも」

「一夏×遊戯もいいわよね」
諦めた女子達は一部怪しい事を言いながら保健室から出て行った。

「ありがとう城之内。保健室で助けてくれて」

「ああ、あれか。誰かと組まれたらバレちまうかもしれないな」

「城之内は自然とそういう事が出来るんだよね」

「そ、そうか？」

「うん。今回の事とか、妹さんの目とか」

「なっ、なんでそれを知ってるんだ!？」

「レッドアイズ達から聞いたんだ」

「そ、そうか……」

「それ以外にもカードを取りに海に飛び込んだりとか、無茶をする
よね」

「そ、それは……」

「カードを取りに行ったのも遊戯のためなんだよね」

「ま、まあそうだが……………」

「誰かの為に迷わずにそういう事が出来るのが……………城之内の強さと……………優しさなんだよ……………」

シャルルの言葉に城之内は次第に顔を赤くしていった。

「とっ、とにかく！この話はこれで終わりだ！寝るぞっ！」

シャルルとの会話を強引に切り上げた城之内はベッドの中に入っていった。

「ふふっ、恥ずかしくなっちゃったんだね」

シャルルはそんな城之内を微笑ましく思った。

「おやすみ、城之内」

一方、遊戯に敗北寸前に追い込まれたラウラはISアリーナで苦惱していた。

「（何故だ……何故私があつた……武藤遊戯に負けてしまったんだ？）」

自分が負けた理由を考え、拳を壁に叩きつける。

「（私は……戦つたために生まれてきた。絶対に、負けるわけにはいかない……武藤遊戯にも、織斑一夏にも！！！）」

勝利に渴望するラウラ……この時、ラウラに何かが寄生した事に誰も気づかなかつた

第18話 心の闇（後書き）

次回でトーナメントに入ります

第19話 激突、そして異変（前書き）

今回は内容にかなり悩みました。なのにグダグダです

第19話 激突、そして異変

遊戯とラウラの激突から数日、学年別トーナメントの日を向かえた。更衣室で遊戯達四人はモニターから観客席の様子を見ていた。

「しかし、すごいなこりゃ……」

「いっぱい来てるね……」

一夏と遊戯の言葉通り、観客席には各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の人間がいた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「そうか、ならあまり目立たない方がいいか」

城之内の言葉通り、二人は異世界の人間のため、あまり目立ってはいけなかった。

「そういえば二人共、手に持ってるのは何なんだ？」

遊戯と城之内の手には仮面が握られていた。

「これ、織斑先生が出来るだけ素性を隠すようにして」

二人が異世界の人間なのを知っている一夏は理解した。

「そうか。ならあまり目立たないようにしないとな」

「うん……でも……」

遊戯は仮面を見ていた。

「（なんでこれがあるんだろう？）」

遊戯の仮面はかつてバトルシティで闘ったグルズのレアハンター、奇術師パンドラの物だった。

「（俺のはまあ……カッコいいけど……）」

城之内の仮面はGXでダークネスに操られた吹雪が付いていた仮面だった。

「一夏と遊戯はラウラとの対戦が気になるのか？」

「まあ、な」

「城之内くんにはわかつちやうか」

「お前との付き合いは長いんだぜ。お前の考えてる事くらいわかるぜ」

「みんな、対戦表が決まったみたいだよ」

モニターがトーナメント表に切り替わり、四人が視線を向けた。

第一試合は……一夏・遊戯ペア対ラウラ・箒ペアだった。

「一戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

「しかも、私の獲物が纏めてだからな」

「獲物って……僕も入ってるの？」

「貴様は私を敗北させたのだ。その雪辱だ」

「ごめんね。僕も負ける気は無いよ」

会話が終わり、試合開始の合図まで数秒

「叩きのめす！」

試合が始まり、開始と同時に一夏は瞬時加速でラウラに接近した。

「おおおっ！」

「ふん……」

ラウラは右手を突き出しAICで一夏を捕らえた。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ラウラがレールカノンの照準を一夏に向けた。

「させないよ！ジャックス・ナイト！！」

遊戯が剣を出現させラウラに斬りかかった。

「ちっ……」

遊戯の攻撃を受けたラウラは後退した。

「このままいくぞ！」

「うん！」

そのまま二人はラウラを追撃した。

「私を忘れてもらっては困る」

二人の追撃を遮るように間に箒が割って入った。

「いくよ、箒さん」

箒のISの刀と遊戯の剣が激突した。

「くっ、くのっ！」

剣が数回衝突した。一見互角に見えるがISの性能差から遊戯が徐々に押していた。

「はあああっ！！」

それに痺れを切らした箒は刀を頭上に大きく振り上げた。

「くっくっくっ！一夏くん！」

「おう！」

箒の一撃を遊戯が受け止め、真横から一夏が接近して箒に一撃を加えようとした。

「これでっ！」

一夏の攻撃が直撃しようとした瞬間

「邪魔だ」

「あああっ！？」

突如ラウラが箒にワイヤーブレードを引っ掛け投げ飛ばした。それは箒を助けたと言いつつ、それは言い難かった。

「（間違いなくあれは箒さんを邪魔だと判断したんだ。ラウラさんに連携しようとする気は無い。あの時の海馬くんと同じだ）」

遊戯が思い出したのは、バトルシティでのグルズのレアハンター、光の仮面と闇の仮面とのタッグデュエルで全く連携しようとしなかった海馬だった。

「まずは貴様から」

ラウラはプラズマ手刀を展開し、遊戯に接近した。

「くっ！キングス・ナイト！」

遊戯は左右からの斬撃を二本の剣で受け止めた。

「一夏くん、箒さんをお願い」

「おう。いくぞ箒」

一夏と箒が激突したが、遊戯との戦闘とラウラに投げ飛ばされた事でシールドエネルギーを消費していた箒が不利だった。

「これでっー！」

「ぬああああっー！！！」

一夏の一撃を受けた箒のISのシールドエネルギーは0になり、膝を着いた。

「遊戯」

「一夏くん」

「第は終わった。一気にいくぞ！」

一夏は零落白夜を発動し、ラウラに直進した。

「そんな物当たらなければいい」

ラウラをAICを使い一夏を拘束しようとするが、一夏が素早く動き、かわした。

「ちよろちよると目障りな……！」

一夏が避けるのに苛立ちだしたラウラはワイヤーブレードを加え一夏を捕らえようとしてた。

「遊戯」

「うん」

ラウラが一夏に気をとられている隙に遊戯がラウラに接近し、杖を出現させた。

ブラック・マジック
「黒魔導……！」

「くっ！」

遊戯の杖から放たれた光弾をラウラは急いで避けた。

「（今のもだけど、サイレントマジシャンの時もあれを使わなかった。まさか）」

遊戯は何か気づいたのか、一夏に話しかけた。

「一夏くん」

「なんだ？」

「僕の推測だけど、あれは近接武器や実弾兵器には強力みただけど、エネルギー兵器には効果が薄いかもしれないんだ」

「そうか！なら遊戯の攻撃を当てれば勝てる！」

遊戯の推測に勝機を見いだした一夏は遊戯の攻撃を当てる隙を作るために接近した。

「無駄だ。どんな戦い方でこよう動きを止めれば」

一夏がラウラに接近した瞬間にAICを発動させ、一夏の動きは止められた。

「……ああ、そうだな。相手が俺一人ならな！」

「!?!」

一夏の言葉で慌てたラウラは周囲を見渡すと遊戯が既に攻撃の体制に入っていた。

ブラック・マシク
「黒魔導!?!」

「くうううつ！」

遊戯の光弾をラウラは慌てて避け、直撃しなかったが、その衝撃で

肩のレールカノンは爆散した。

「よしっ！」

ラウラが遊戯の攻撃を回避した瞬間に一夏の拘束が解け、一夏は攻撃の体制に入った。

「これでっ！！！」

一夏が一撃を与える寸前、勝利を確信した瞬間

キユウウウン……………

「なっ！？エネルギー切れかよ」

白式のエネルギーが切れ、零落白夜が解除されてしまった。

「残念だったな」

ラウラはプラズマ手刀を展開し、一夏に襲いかかった。

「くそっ」

エネルギー切れで形成逆転された一夏はラウラの攻撃を必死に避けた。

「僕に任せて！」

遊戯はラウラに接近した。

「貴様は後だ！」

ラウラはワイヤーブレードを使い遊戯を攻撃するが、遊戯はそれを回避する。

「この距離までこれれば、六芒星の呪縛！」

ラウラの周囲に魔法陣のような物が出現し、ラウラは拘束された。遊戯が使用したのは六芒星の呪縛。一定時間、相手の攻撃と動きを封じる事が出来る。しかしそれを使うには相手にある程度接近しなければならぬ。

「くっ！これでは避ける事も、停止結界も使えない」

「うおおおおおおつ！！」

遊戯は杖に力を集め、杖をラウラに向けた。

ブラック・マジック
「黒魔導！！」

「ぬあああああつ！！」

遊戯の一撃が直撃し、誰もが二人の勝利を確信したその時……
・・異変が起こった。

第19話 激突、そして異変（後書き）

後二話くらいで二巻が終わります

第20話 寄生虫の驚異

「あああああつ!!!!!!」

「うあああああつ!」

突如ラウラが悲鳴をあげ、同時に周囲に衝撃が起こり、近くにいた遊戯が吹き飛ばされた。

「遊戯!大丈夫かつ!?!」

「………僕は大丈夫………それよりも」

遊戯と一夏が視線を向けるとラウラのISがどろどろに溶け始めていた。

「なんだよ、あれ………」

するとISだった物は一つに集まり固まっていった。

「固まっている………」

するとそれはISを纏った人の様に形になり、その手には刀が握られていた。

「あれは………つて一夏くん!?!」

遊戯が気がつくのと一夏がそれに向かって飛び込んでいた。

「ぐっつ！」

ISだった物は一夏に剣振るい、ギリギリで直撃を回避した一夏だったが、シールドエネルギーが底を着いていた白式は衝撃で解除されてしまった。

「それがどうしたあああつ！！」

それでも一夏はそれに向かって駆けだしていった。
それを後ろから遊戯と箒が取り押さえた。

「一夏くん！何をやってるの！？」

「そうだ！死ぬ気か！？」

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

すると一夏の前にブラックマジシャンとカオス・ソルジャーが出てきた。

落ち着いてください！何故頭に血が上っているかは知りませんが、
それでは死に行く物です！

私と共に戦ったあなたは落ち着きがあり、技術もありました。し
かし今はそれがありません

「邪魔すんじゃないやねえ！邪魔をするならお前らも！」

ブラック・マジック
黒魔導ー！！

「うあああつー！！」

ブラックマジシャンが地面に光弾を放ち、爆風で一夏が吹き飛ばされた。

「何しやがる!？」

もしマスターと篝殿が止めなければそれ以上のダメージを負っていた。それは理解しろ。まずは頭に血が上った理由を話してください

「あいつは……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ」

「織斑先生のデータ!？」

「ああ。あの構えは間違いない」

「だからあんなに」

一夏から理由を聞くと、ISに更なる異変が起き始めた。突如ISがもがきだし、体中から触手が飛び出し、昆虫の足と羽が出てきていた。

「なんだあれは、虫か？」

「遊戯!」

そこに城之内が駆けつけた。

「あれは………パラサイドかよ」

寄生虫パラサイド。バトルシティにおいて城之内がインセクター羽蛾とデュエルした時に羽蛾の策略で城之内のデッキに紛れ込まされ、城之内のモンスターに寄生し、城之内を苦しめた。

「……………ごめん一夏くん。これは僕にやらせて」

「おい遊戯!」

「マジカル・シルクハット」

「おいっ!」

不満そうな一夏と箒がシルクハットでどこかに飛ばされた。

「おい遊戯」

「城之内くん。これは僕にやらせてほしいんだ」

「……………わかった。無茶はするなよ」

城之内は一步下がり、遊戯を見守る事にした。

「バスターブレイダー!」

遊戯がバスターブレイダーの剣を出現した瞬間にパラサイドが遊戯に襲いかかり、遊戯がそれを受け止めた。

「くっ!」

マスター、何か気になる事があるのか

「一夏くんはあの姿は織斑先生だと言っていた。ラウラさんは織斑先生に憧れていた。ひよつとしたらこれはラウラさんの織斑先生への憧れが心の闇になって形になったのかもしれない。以前もう一人の僕がオレイカルコスの結果を使って心の闇に飲み込まれた時に僕はもう一人の僕を止める事ができなかった。今度こそ止めたいんだ」

遊戯はかつて、ドーマと呼ばれる勢力と闘い、その中で心の闇に飲み込まれたもう一人の遊戯は次々とモンスター捨て駒にする暴挙に出してしまった。

「……確かにあの時俺たちはマスターを止める事ができなかった。今回はなんとしても止めるぞ！」

遊戯は決意を固めパラサイドに向かっていった。

しかしパラサイドの猛攻に遊戯は一撃を加えられなかった。剣での攻撃に更に触手による猛攻に遊戯は防戦一方だった。

「ぬあっ！」

触手の攻撃に耐えられなくなり、体制を崩した遊戯に剣が振り下ろされそうになった。

「しまった！」

しかし

ガキイイーン！！

城之内が鎖付きブーメランを投げ、パラサイドの剣を止めた。

「今だ遊戯！あいつを、ラウラを救うんだろ！！」

「城之内くん。うん」

遊戯は剣を構えてラウラに突っ込んだ。

「うおおおおおおおっ！！」

遊戯はパラサイドを斬り裂き、その中から出てきたラウラを受け止めた

「よかった……助けられて」

カサカサ……ザクツ！！

キシヤアアアツ！！

ラウラから離れたパラサイドが逃げようとするのを城之内が銛で貫き、パラサイドは消滅した。

「やっぱりこいつが寄生していやがったか」

「ありがとう城之内くん」

「そいつは大丈夫なのか？」

「今は気を失っているだけみたいだけど、パラサイドに寄生されて体にダメージが残っているかも。ホーリー・エルフ」

わかりました

遊戯はホーリー・エルフを呼び出し、ラウラを癒し始めた。

「これでパラサイドのダメージは残らないはずだから、すぐに保健室に運ぼう」

こんして新たな事件は収束した。

第20話 寄生虫の驚異（後書き）

次回で二巻は終わりです。更に三巻からは遊戯王キャラを増やそう
と思います

第21話 闇から解き放たれた少女(前書き)

今回で二巻は終わりです。次回から三巻に入ります。

第21話 闇から解き放たれた少女

「う、うんん……」

ラウラが気がついたのは保健室のベッドの上だった

「あ、気がついた」

その側に遊戯がいた。

「何が……起きたのだ」

「試合で僕と一夏くんがラウラさんに勝ったと思ったら、急にラウラさんのISが変化したんだ。それでなんとか騒ぎを止めて、ラウラさんをここまで運んだんだ」

遊戯はラウラにパラサイドの事を隠していた。

「そっか……っつ……」

「駄目だよ無理しちゃ。体にダメージが残っているんだから」

「………すまない」

「ねえラウラさん」

「………なんだ？」

「ラウラさんは織斑先生に憧れているんだよね？」

「……そうだ。IS適合性向上のための処置に失敗し、ドイツ軍で出来損ないの烙印を押された私をここまで強くしてくれたのは教官だった。私はあの人の強さに、凜々しさに憧れた。あの人のようになりたいよ」

「誰かに憧れる気持ちは分かるよ。僕にも憧れる人がいたんだ」

「お前の憧れる者？」

「うん。その頃の僕は気が弱くて、勇気も持てず、何もできなかったんだ。そしてずっと願ってた。親友がほしって。どんな時でも裏切らない。そして裏切れない親友がて。そんな時にその人と出会ったんだ。その人は常に強気で自信に満ちてて、友達もできず、弱い存在だった僕に勇気をくれたんだ。そんな彼に僕は憧れた。彼と出会って城之内くんやたくさんの友達ができた。僕の願いを叶えてくれたんだ」

「それがお前の憧れ」

「城之内くんは彼を目標にしている、いつしか彼は誰もが憧れる存在になったんだ。そしてある日、彼は僕に言ったんだ。『お前は弱くなんかない…ずっと誰にも負けない強さを持っていたじゃないか…優しさって強さを…俺はお前から教わったんだぜ』って」

「誰にも負けない……強さ」

「彼はこうも言った。『お前は…誰でもないお前自身！遊戯って名の…たった一人の存在なんだ』と。どんなに憧れても君はラウラさなんだ。織斑先生にはなれないんだ。だから、誰でもない君自身にな

るんだ」

「誰でもない……私自身」

「うん。僕も手伝っよ」

この時ラウラが遊戯に特別な感情が芽生え初めていた事に誰も気づいていなかった。

その後遊戯は一夏達三人と夕食を食べていた。

「トーナメントは中止だってね」

「あんな事になったんじゃ仕方ないよな」

「パラサイドもそうだけどよ、最初のあれは結局なんだったんだろ
うな」

「俺達にもわかんねえよ」

「パラサイドだっけ、あれがなかったらもう少し楽だったの？」

「それはわからないよ。あの時は必死だったし」

「つーか遊戯。あの時なんで追い出したんだよ？」

「だってあのままじゃ一夏くんまた突っ込んで死んでたかもしれないだよ」

遊戯から正論を言われ、黙ってしまう。そんな一夏を見ている筈がいた

一夏は筈に気づき、近づいた。

「そういえば筈。先月の約束だが」

「約束？」

約束の意味がわからず、遊戯達は首を傾げる。

実は筈は部屋移動の際、一夏と学年別トーナメントに優勝したら付き合ってもらおうという約束をしていた。

「付き合ってもいいぞ」

「……………なに？」

「ほ、ほ、本当、か？本当に、本当に、本当なのだな？」

「お、おう」

「一夏は筈と付き合うのかあ」

「そうみたいだね。ただ……嫌な予感がするんだけど……」

遊戯の予感が的中してしまう

「幼なじみだからな。買い物くらい付き合っぜ」

「……………」

一夏の言葉を聞き、箒は嬉しそうな表情から険しい表情になった。

「……………だろつと……………」

「お、おう」

「そんなことだろつと思っただわ!！」

「ぐはあっ!！」

箒は一夏の腹部を殴り、去っていった

「ふん!！」

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがありよね」

「あれで素だから質がわりいんだよね」

「これからもあんな調子なのから?一夏くん」

「あ、織斑君に武藤君に城之内君にデュノア君。ここにいましたか」

「山田先生、どうしたんですか?」

「男子の皆さんに朗報です！」

「……朗報？」

「なんとですね！ついに今日から男子の大浴場が解禁です！」

「本当ですか！？てつきり来月からだと」

「今日はボイラー点検があつたので、もともと生徒たちが使えない日なんです。点検したいはもう終わったので、それなら男子の皆さんに使ってもらおうって計らいなんですよ！」

一夏が大浴場に入れる事に喜んでいるなか、遊戯達三人は思った。「まずい」と。

シャルルは周囲に男で通しているが、実際は女である。

そして一夏はその事を知らない。以前から一夏が風呂に入りたがっていた事を三人は知っており、一夏が強引に誘う事が予感できる。

「どうする……シャルルが女なのがバレちまうぞ」

「どうしよう……やっぱり一夏くんに話した方が……」

三人が打開策を考えていると

……ライティングサンダー

「ぐあっ？」

突然一夏が倒れてしまった。

「一夏くん!？」

「なっ、なんだ!？」

これで大丈夫でしょう

「ゴルフオード!？」

これで一夏は一晩動けない

「まあ、バレるよりはいいか……………」

「織斑君……………?どうしたんですか?」

「た、多分一夏の奴は疲れが溜まっていた所に風呂に入れるのを聞いて気が抜けたんですよ」

「一夏くんは僕達が部屋に運んでおきますので、山田先生は気にしないでください」

「そ、そうですか」

遊戯達は一夏を部屋まで運び、ベッドに寝かせた。

「さてと、これからどうするか？」

「シャルルくんが入ってきたら。僕達はいいから」

「い、いや僕はいいよ。ぼ、僕、あまりお風呂好きじゃないから遊戯達が入ってきて」

「そうなのか。なら俺達で入るか」

「一夏くんには悪いけど、入ろうか」

「ぶはああああ、生き返るぜえ」

「うん。そういえばこの世界に来てからお風呂に入るの初めてだよ
ね」

「こっちに来てから結構経つから、ずっと入ってないよな」

2人は久しぶりに入る風呂を満喫していた。

「それじゃあ僕は先上がるね」

「おう、俺ももう少ししたら上がるぜ」

遊戯が出てしばらく経つと

カラカラカラッ

「なんだ遊戯、忘れ物か………って」

「お、お邪魔します………」

城之内が振り向くとバスタオルを巻いたシャルルがいた

「あんまり見ないで………城之内のエッチ」

「す、すまねえ」

目の前に裸のシャルルがいて、一夏と違いスケベ心を持つ城之内も戸惑ってしまう。

「ど、どうしたんだいきなり」

「や、やっぱり僕も入ろうかな………て………城之内は僕と一緒にじゃ、嫌？」

「い、いや………別にそういうわけじゃ」

「それから、城之内に話があるんだ。聞いてくれるかな？」

「お、おう。なんだ？」

「そ、その………前に話したこと、なんだけど」

「前につて……学園に残るつて話か？」

「う、うん。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだつて居場所を見つけられてないし、それにね……」

「それに……？つてシャルル！？」

シャルルは背中に触れた手を滑らせて城之内を抱きしめた。背中にシャルルが密着し、城之内は更に緊張する。

「……城之内が、ここにいればいいつて言ってくれたから。そんな優希がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そ、そうなのか……」

「それに、ね。もうひとつ決めたんだ」

「もう一つつて？なんだ？シャルル」

「シャルロット」

「えっ？」

「これからはシャルロットつて呼んで、城之内」

「シャルロット……それが本当の名前か？」

「うん、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかったぜ……改めてよろしくな、シャルロット」

「うん。よろしく、城之内」

「皆さんに転校生を紹介します。というよりは、既に紹介は済んでいると言いますか……………」

翌日のホームルーム、教壇に立つ真耶の言葉の意味がわからず、全員が首を傾げる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

教室に入ってきたのは

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願います」

IS学園の女子制服を着たシャルロットだった。これに女子達が騒ぎ出す。

「え？デュノア君って女……………」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、城之内君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！昨日で確か、男子が大浴場を使ったわよね」

ドガアアアン！！！！

「一夏あつ！！！！」

ISを纏った鈴が壁を破壊し、現れた。

「う、うあああつ！！！！」

危険を察知した一夏は逃げ出す。

一夏が逃げた先には……

「い、一夏くん！？」

「こつち来んなあああつ！！！！」

遊戯と城之内がいた。

「死ね！！！！」

そんな事はお構いなしに鈴は衝撃砲を発射する。

三人は思わず目を閉じる。

しかし、何も起きず、三人が目を開けると……

「……………ラウラさん」

ラウラがISを纏い、AICを発動して衝撃砲を防いだ。

「助かったぜ。さん。」

「邪魔だ」

「えっ、え!?!」

ラウラは一夏をどかし、遊戯に近づき……そして

「むぐっ!?!」

遊戯の唇に自らの唇を近づけ、キスをした。

「お、お前は私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「……よ、嫁?婿じゃないの?」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故にお前を私の嫁にする!」

「だ、誰から聞いたの?」

遊戯は放心状態になり、一夏は箒、セシリア、鈴から追いかけられていた

「大変だな遊戯も、一夏」

ジャキンッ!

「……………え？」

城之内が振り向くと……………

マスターアアアアア

じょ〜うのうち〜

殺気剥き出しのギア・フリードとエルフの剣士が剣を突きつけていた。

「お、お前ら……………どうしたんだ？」

よくも我らが姫君とおおお……………

たとえマスターといえども

「うああああああつー!」

城之内も2体のモンスターから追いかけられるはめになり、その日は学園中に悲鳴が響いた。

第21話 闇から解き放たれた少女（後書き）

感想をよろしくお願いします

第22話 白龍の降臨(前書き)

ついにあの人が登場ですが、かなりグダグダです

第22話 白龍の降臨

「ごめんね、手伝ってもらっちゃって」

「気にするなよ」

放課後の廊下を歩く城之内とシャルロット。赤い夕日が差し込み、廊下に二人の影を伸ばす。二人の手には今月の学校行事・臨海学校について書かれたプリントを持っている。

「でも、良かったの？今日は遊戯達と街に行く予定だったんでしょ？」

「そうだけど、いいんだよ。シャルロットがいないのに行ってもしょうがないしよ」

「え？」

「まあ、なんだ、あれだ。好きな奴と一緒にの方がいいんだよ。何をすることもな」

城之内の頬が赤くなっている。それは夕日のせいだけではないように見える。

「城之内…」

「シャルロット…」

二人しかいない廊下で見つめ合う。そこに言葉はいらない。

廊下に伸びる影が徐々に重なって―

「―あ、れ？」

ポーツとした頭で状況を確認する。

場所はIS学園初等科寮の自室。時刻は早朝6時。

「……………」

シャルロットはまだはつきりしない意識のまま、一回まばたきしたところで現状を把握した。

「夢……………」

はああああ…と深くため息をつく。

「（ああ、せめてもう十秒くらい見てれば…………）」

夢に思いを馳せ、その名残を惜しむ。

目が覚めると急速に失われていく夢の内容も、執着からなかなか消えずに手元に残っていた。それを、お気に入りのDVDを見るような感覚で、脳内リピートする。

「……………」

ぼっ、とシャルロットが赤くなった。

だんだんと夢の内容が途端に恥ずかしくなってくる。

（が、学校の廊下で……………城之内……………）

文字通り夢見心地だった。胸に手を当てると、ドキドキと鼓動が早くなっているのがわかる。

(ぼ、僕は何を考えてるんだらうね…)

先週の学年別トーナメント以降、シャルル・デュノアではなく、シヤルロット・デュノアに戻ってそれまで同室だった城之内とは別の部屋に移動になっている

「あれ？」

隣のベッドにルームメイトの姿がない。

それだけでなく、最初からそのベッドを使った形跡がない。

「……まあ、いいや」

今すぐ眠りにつけば、もしかしたら夢の続きが見れるかもしれない。そんな淡い期待を抱いて、シヤルロットはまた眠りにつこうとまぶたを閉じた。

一方、遊戯と城之内の部屋。

シヤルロットの再転入後、男子が一夏が一人、遊戯と城之内が再び

同室になっている。

「うあああああっ!」

「遊戯!どうした………」

遊戯の悲鳴で城之内が目覚めますがすぐに固まってしまつ。その理由は……

「ん……。なんだ……。騒がしい、朝か……」

遊戯のベッドの中からラウラが出てきた。

それも眼帯と待機形態のES、右の太ももに着けた黒いレッグバンド以外何も身に纏っていない裸の状態で。

「あ、あわわわ」

「お、おい……」

「ん?どうしたのだ?」

「と、とりあえず、隠して!」

遊戯はラウラをできるだけ見ないようにしながら毛布を渡す。

「おかしなことを言う。夫婦と包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「た、たしかにそうだけど……。ってそれよりも服着て、服!」

「そ、そうだ!早く服を着ろよ!というかなんで裸なんだよ!?」

「私は寝る時は何も着ない！」

「着てよっ（ろよ）！」

「服を着てないもそうだけど、なんで僕の布団の中にいたの？」

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ。将来結ばれる者同士の定番だと」

「誰からそういつ間違った知識を教わってるの？」

「しかし効果はテキメンのようだな。目が覚めただろう」

「確かに覚めたけど！」

「毎朝これじゃ遊戯の身が保たねえぞ！」

「ふむ。城之内が邪魔だな。明日からは城之内を鎖で縛って窓から投げ捨てるか」

「明日もやるのかよ！？しかも俺を殺す気か！？」

「……冗談だ」

「軍人のお前が言うと冗談に聞こえねえよ！」

この後も三人を交えての討論は続いた。

ちなみに遊戯はキスの一件以来ラウラから『夫婦なのだから呼び捨

てにしろ!』と言われ、ラウラを呼び捨てにしている。

その日の放課後、シャルロットが暗い表情をしていたので遊戯、城之内、一夏の三人が話しかけた。

「シャルロットさん。どうかしたの?」

「ああ。ちょっと考え事をしてね」

「考え事?」

「うん。こうして女の子として再転入した事で」

「男装の事は遊戯達から聞いたけど、親父の指示で自分の意志じゃないんだろ?何を悩んでるんだよ?」

「いやね。僕が指示を実行しないでデュノア社が潰れたら、そこで働いてる沢山の社員やその家族の人達が苦しいだろうなって、ふと思っただ」

「その事か。確かにシャルロットの男装の件に関わってない人達だっつて沢山いるだろうし、そんな人達にも迷惑がかけると」

城之内は家あまり裕福でないためか、シャルロットの考えている事がすぐに理解できた。

「うん。ひよっとしたらあの時は、そんな人達の生活のためについてどこかて考えてたかもしれないんだ」

「確かに大企業の社員全員の生活を守るのは大変だろうしな」

一夏の言葉に全員が頭を抱えてしまう

「（あいつがいればなんとかあったかもしれないんだけどな）」

城之内がある人物の事を考えていると、異変が起こり始めた。

「な、何！？」

突如、四人がいた教室の中心が光り出し始めた。

「これって、遊戯達が来た時と同じ！」

「ああ。俺と遊戯もこの光に飲み込まれて来たんだ」

「また誰かくるの！？」

すると光が消え、その場に一人の青年が倒れていた。

特徴的な白いコートを羽織り、そのコートの襟とベルトのバックルにKCのマークの長身の青年。

遊戯の城之内にはその青年に見覚えがあった。なぜなら

「海馬アア（くん）！！？」

二人の好敵手^{ライバル}なのだから。

「おい海馬！しっかりしろ！」

「どうやら気を失っているみたいだぞ」

「城之内くんと一夏くんは海馬くんを保健室まで。僕とシャルロットさんは織斑先生を呼んでくるよ」

「わかった。いくぞ一夏」

「ああ」

城之内が海馬の上側を、一夏が下側を持ち上げて海馬を運び、遊戯とシャルロットは織斑先生を呼びに職員室に向かった。

その後海馬が目を覚ますと保健室のベッドの上だった。何故自分がここにしているのかを考え始める。

「ここは………いったい………？」

すると扉が開く音がし、海馬が視線を向けると遊戯と城之内がいた。

「……………遊戯……………城之内？」

「よかった。気がついたんだね」

「俺は……………いつたい？」

「自分がここに来る直前の事を覚えてるか」

「……………確か……………決闘者育成施設の設立が決定し、建設予定地を視察に訪れ、そこで妙な光に飲み込まれて、気がついたらここにいた」

「僕達とおなじなんだ。信じないと思うけど、ここは異世界なんだ」

「異世界だと！？下らんオカルトよりはマシだが信じられんな」

「やっぱりな、証拠を見せてやるからついてこいよ」

城之内に言われ、保健室から移動し、三人はISアリーナにたどり着いた。

そこで遊戯と城之内はISを起動させた。

「それは？」

「IS、この世界の技術で作られた物だよ」

「確かに俺達の世界には無い技術だな。不本意だが信じよう」

海馬が納得した瞬間

「なんだ！？」

海馬の首の付近が光り出した。
海馬の首には弟のモクバの写真が入ったペンダントとは別に白い翼のようなペンダントが架けられていた。

「これは？」

『マスター認証、海馬瀬人。 个体名称を登録してください』

「まさかそれが、海馬のISなのか」

「名前か………よし、お前の名は栄光だ！^{グローリー}」

『个体名称を登録しました。 ISを展開します』

海馬は光に包まれ、 光が消えた時には海馬は白を基調にしたISを装着してた。

「これが俺のIS」

聞こえますか？マスター

「誰だ！？」

海馬が応えると三体の白い龍が出現した。

「お前達は………」

はじめましてマスター。 そうです。 私達です

「落ち着いて、城之内くん」

「まずはお前の名前を聞かせてもらおう」

「海馬瀬人だ」

「海馬、どうやらお前もISを起動させたようだな。お前にはIS学園に通ってもらおう」

「選択権は」

「お前は这个世界に行くあてなど無いだろう？ならばここにいるのが得策だと思うが。それにお前はISで頂点に立つ気なのだろう？ここには素人のお前より強い者が多くいる」

「いいだろう。通ってやるっ」

こうして海馬のIS学園転入が決まった。

第22話 白龍の降臨（後書き）

最近一夏の影が薄くなっていますが臨海学校で活躍させます

第23話 激突！黒龍VS白龍（前書き）

新年あけましておめでとございます。

大晦日に更新できるかと思いましたが、あまり執筆が進みませんでした。

相変わらずの低クオリティですがどうぞぞ

第23話 激突！黒龍VS白龍

翌日の海馬の転入が決まり、海馬の寮の部屋は一夏と同室になり、その日の夜

「頼む海馬！力を貸してくれ！」

「凡骨……もう一度言ってみろ」

「だから、第三世代型ISの設計を頼みたい。一人でデュエルディスクを開発したお前なら出来ない事じゃ無いだろ」

「断る！俺には貴様の頼みを聞く理由が無い」

「俺のためじゃない！シャルロットのためなんだ」

マスター

「ブルーアイズ」

海馬のデッキからブルーアイズの一体が出てきた。

理由だけでも聞いてあげましょう

「……………理由を聞こう」

そして城之内はシャルロットとデュノア社の事を話した。

「あいつは、愛人の娘なんて理由だけで道具にされたんだ。今はそ

れを乗り越えようとしてるが、自分がした事で、関係ない人達を苦しめるんじゃないかて考えてるんだ。だからその心配を無くしたいんだ」

「なるほど。だから俺に第三世代型ISの設計を頼んでその心配を無くそうというわけか」

「ああ。お前も海馬コーポレーションの社長なら社員の生活を守る責任がわかるだろ！？お前が海馬コーポレーションを乗っ取らなかつたら、モクバだって道具にされてたかもしれないんだぞ！！」

城之内の言葉を聞き、海馬は次第に何かを考える表情になる。

「ふむ……………いいだろう」

「！本当か！？」

「但し、条件がある」

「……………え？」

翌日、海馬が転入し、（当然女子達は大騒ぎだった）その日の放課後

「約束は守るんだな、海馬」

「当然だ。もつとも俺に勝てればだがな」

「ISの事なら俺の方が長いんだ。負けねえよ」

二人はISを展開して、アリーナにいた。

そんな二人を観客席から遊戯、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラが見ていた。

「ねえ、なんであの二人が勝負するのよ？」

鈴が一夏に問いかけた。

「なんでもよ、城之内が勝ったら第三世代型のISを設計しろらしいんだ」

「第三世代型で……ひょっとして城之内は僕のために」

「しかし遊戯、あの海馬という男はISの設計ができるのか？」

「ISはできるかわからないけど、海馬くんは元の世界じゃ一人でソリッド・ビジョンやデュエルディスクの設計をしているんだ」

「マジかよ!? あいつはそんな才能があんのかよ!？」

「ISを開発した私の姉と同じ、天才なのか？」

「海馬くんの場合、その能力は育った環境による所が多いと思うんだ」

「どのような環境だったのですか？」

セシリアの質問に遊戯は悩んだ。話していいのか、人の過去を他人に話して、しかし遊戯は話す決意をした。

「僕も聞いた話でしか知らないけど、お母さんは弟のモクバくんが生まれてすぐに、お父さんも三年後に亡くなったんだ」

「両親を亡くしたんだ……」

「それで、周りの親戚は両親の遺産を食い荒らしたあげく、二人を施設に預けたんだ」

「わたくしも……両親の遺産を守れなかったら……そうになっていたのですね」

「それからしばらく経って、施設にある人が養子を探しにやって来たんだ」

「ある人物？」

「海馬剛三郎。その人は海馬コーポレーションの社長で、同時にチェスの世界大会の覇者であることを海馬くんは知っていた。だから海馬くんが彼に頼んだんだ。『チェスで勝ったら自分と弟をしる』と」

「すごいことするわね。チェスの覇者にチェスで勝負を挑んで、勝ったら養子にしるだなんて」

「そして海馬くんは勝ち、二人は彼の養子になった。そして海馬く

んはあらゆる英才教育をたたき込まれたんだ。語学、社会学、経営学、ゲーム戦術、それはまるで拷問のような日々が続いたらしい」

「つまり、海馬さんの能力はその教育の結果というわけですね」

「だが海馬くんは彼の想像以上の存在になったんだ」

「海馬の奴、何したんだよ」

「海馬コーポレーションを乗っ取ったんだ」

「乗っ取ったのかよ！？会社を」

「うん」

「多分、剛三郎て人は海馬を道具にしようとしたのかもしれない」

シャルロットは海馬を以前の自分と重ねていた。

「それで彼は会社を乗っ取られた失意から衰弱し、亡くなったらしいんだ」

「それって、海馬が殺したも同然じゃない！」

鈴の言葉に遊戯が頷いた。

「そうなるね。その後海馬くんは軍需産業だった海馬コーポレーションをゲーム産業に作り替えたんだ」

「何故、軍需産業をゲーム産業に作り替えたんだ」

ラウラの疑問は全員が思っただろう。軍需産業とゲーム産業は全く違うからだ。

「海馬くんには、夢があるんだ」

「夢？」

「うん。恵まれない子供達が無料で遊べることが出来る遊園地を世界中に作るっていう夢が」

「そんな夢が」

「そうか。以前の自分や弟のような子供達に幸せになってほしいんだな」

「いくぜ！パンサーウォリアー！」

「ブレイドナイト！」

二人はそれぞれの剣と盾を出現させ構えた。

「うおおおおおっ！！」

「ふんっ！」

「くっ！」

城之内が海馬に向けて突進し剣を振るい、海馬が盾で受け止め、剣を振るい、城之内が盾で受け止めた。

「うらあああっ！」

城之内が剣を盾から離し再び振るった。

「あまいっ！」

「えっ？」

海馬の右腕から光線が放たれ、それを受けた城之内の剣は半分くらいの大きさに縮んだ。

「なんだよこれ!？」

「収縮を使わせてもらった」

「なにいいいいっ！」

「ふんっ！！」

「ぐああああっ！」

海馬が剣で城之内を弾き飛ばし、肩から大砲をだした。

「X-ヘッド・キャノン！発射！！」

「ぐああああっ！」

肩の大砲からの砲撃が城之内に直撃した。

「まだまだっ！！」

「ぐああああっ！！！！」

その後も海馬の砲撃が城之内を襲う。

「ウソだろ！城之内が………圧されてる！？」

「海馬は、ISを動かしたばかりだよね！？」

その闘いを見ていた誰もが驚いていた。ISを動かしたばかりの海馬が、ISを動かし始めてそれなり経つ城之内を圧倒しているからだ。

「城之内は動きが単調だから、それを読まれてるってのもあるかも

しれないけど、それでもあそこまで圧倒してるなんて…」

「海馬さんが既にISを使いこなしてるのですね」

「遊戯や城之内もだが、ISを動かしたばかりで、あそこまでできるとは」

「あの二人は元々運動神経が良いからそれも手伝ってるのかもしれない」

「だからといって、簡単にあそこまで使いこなせる物ではないぞ！」

使い始めて間もない海馬がISを使いこなしている事実には全員が呆然とするしかなかった。

「くっそ、けどな……シャルロットの為に、負けるわけにはいかないんだよ……」

海馬の砲撃が続く中、城之内が叫んだ。

「鎖付きブーメラン……」

城之内がブーメランを投げ、それを受けた海馬は砲撃を止めた。

「ちいっ……」

その隙に城之内は移動を開始した。

「（どうする、さっきの攻撃でシールドエネルギーが殆ど無くなっちゃった。これ以上くらったらやられる）」

城之内はなんとか状況を打開しようと考えた。

「ちよろちよると！」

海馬が再び城之内に砲撃を始めた。

「こうなったら、悪魔のサイコロ！」

城之内の手に赤いサイコロが出現した。

「いけっ！」

城之内がサイコロを投げ、出た目は……

6

「よっしゃー、これではらく海馬の能力は6分の1だ！」

城之内は一か八かで運に強い男である。

「なにっ!?!」

その瞬間に海馬の砲撃の威力が弱まり始めた。

「今だ!うおおおおっ!?!」

城之内は海馬に接近した。

「黒炎弾!?!」

「ぐあああああっ!?!」

至近距離からの一撃を受けて海馬は吹き飛ぶ。

「凡骨がああっ………ならば!?!」

海馬が右腕の砲門を開いた。

「滅びのバーストストリーム!?!」

「うおおっ!?!」

海馬が放った光線を城之内は回避し、光線が直撃した地面に大きな爆発が起きた。

「なんつー威力だ。あれをくらったら終わりだ」

「まだだっ!?!」

海馬は再び光線を放ち、城之内が回避する。

「黒炎弾!!」

「無駄な足掻きだ!」

城之内が火球を放つが海馬の光線で吹き飛ばされた。

「くそつ、悪魔のサイコロの効果が切れてやがる。ブルーアイズの破壊力をどうにかしないと、だが手はある。天使のサイコロ!」

城之内の手に青いサイコロが出現した。

「こいつは自分と味方ISをサイコロの出た目の倍に一定時間強化する」

「懲りずに運任せか」

「運任せだろうと、勝ってやるぜ!」

サイコロを投げ、出た目は……

2

「2かよ」

「運に頼った結果がそれか」

「まだまだ！墓あらし！」

墓あらし、相手が使った装備、能力を一回の機動で一度だけ使える
反則級の能力

「お前の収縮を使わせてもらうぜ！」

城之内から光線が海馬の右腕に放たれ、右腕の砲門が小さくなった。

「これで終わりだ！黒炎弾！！！」

城之内が火球を放ち、城之内は勝利を確信した。

「馬鹿め！ブルーアイズが三体いる事を忘れたか！！！」

海馬の左腕と頭部の砲門を開いた。

「滅びのバーストストリーム！！！」

「ぐあああああつ！！！！！」

三つの砲門から放たれた光線が火球を吹き飛ばし、そのまま城之内
に直撃した。

「くそっ！負けるわけには……いかなかったのに」

模擬戦後、城之内は落胆していた。自分がシャルロットのために何
ができなかった事に。

「凡骨」

「……海馬」

「残念だったな」

「……笑いに来たのかよ……」

「運だけで勝てるほど勝負は甘くない」

「勝負に負けたから。話は無しなんだろ？」

「そうだな。だが……気が変わった」

「……え？」

「第三世代型の設計をしてやる」

「本当か！？けど、どうして？」

「この世界の技術力は高いようだからな。技術を持って帰れば海馬

コーポレーションの役に立つかもしれないからな。そのためには直
接触れるのが一番だ」

「……………ありがとう、海馬」

そして海馬は第三世代型ISの設計を始めた。

第23話 激突！黒龍VS白龍（後書き）

城之内ばかりメインになってる気がします

第24話 海に向けて(前書き)

今回も城之内メインです

第24話 海に向けて

城之内の海馬の勝負から数日後の日曜日。IS学園から街に向けてのモノレール内に城之内とシャルロットの姿があった。

「ありがとう。付き合ってくれて」

「いって。俺も水着を持ってなかったから俺も買いに行くつもりだったよ」

先日城之内はシャルロットから「水着を買いに行くのに付き合っほしい」と頼んでいた。

断る理由が無かった城之内はすぐにいいと応えた。

ちなみにその時に城之内が

「遊戯も水着を持ってないし、誘っていきこうぜ!」と言ったので、城之内とのデートを期待したシャルロットは少し残念そうだった

だが遊戯は

「遊戯は私の買い物に付き合ってもらおう」とラウラに強引に誘われたのでの二人とは行動をしていない。

「そつえばさ、二人はお金は持つてるの?」

「ああ。こないだな」

「武藤。城之内。これを渡しておく」

そうやって千冬は遊戯に封筒を渡した。遊戯が中を開けてみるとお札が数十枚入っていて、二人驚いていた。

「織斑先生。これは……」

「国からの謝礼金だ。」

「国からの……何で俺たちに……」

城之内がそう聞くと、千冬は何故か嫌そうな顔をした。

「お前達にはIS学園で起きた事件……クラス対抗戦での敵機撃退とツーマンセルトーナメントでのラウラの暴走を止めた功績が国に認められて、その謝礼金だ。受け取っておけ。」

「まあ。生活するのに金は必要だしな。ありがたく使わせてもらおうぜ」

城之内が言った瞬間に千冬が出席簿で城之内の頭を叩いた。

「いっ」

「目上の者には敬語を使え」

「すい……ません」

二人が話しているとモノレールが目的地に到着した。
二人がモノレールから出ると、デッキからレッドアイズが城之内に話しかけた。

城之内。シャルロットと手をつないでやれ

「どうしたんだよレッドアイズ。いきなり」

まあ、なんだ。お前もシャルロットも始めての場所だろ。そこではぐれたら合流するのも大変だからな

「それもそうだな」

レッドアイズの言葉に納得した城之内はシャルロットの手を握った。

「ど、どうしたの？」

突然の事にシャルロットは顔を赤くする。

「はぐれたら大変だからな。手をつないでいようぜ」

「うっ、うん」

城之内とシャルロットは手を繋いでシヨッピングモールに向かった。城之内に手を握られたシャルロットはどこか嬉しそうだった。

うまくいったな

考えたな。レッドアイズ

デッキの中で炎の剣士がレッドアイズに話しかけていた。

城之内はシャルロットの事をそういつた意識をしていない。俺たちで誘導するしかない

あと、ギルフォードが障害を事前に排除できたからな。後は誘導するだけだ

炎の剣士が言う障害とは

城之内がシャルロットとデートだと!!??おのれええええっ、城之内を抹殺する!!!

エルフの剣士が城之内の抹殺に向かおうとしたその時

やらせはせん!やらせはせんぞ!

ギルフォード・ザ・ライトニングがエルフの剣士の前に立ちはだかっ
った。

くっ、うおおおおおっ!!!

エルフの剣士がギルフォードに向かっていくが齒が立たず、返り討ちにあった。

「えーと、水着売り場はここみたいだな」

「そうだね」

「男物と女物が別々の場所だし、いったん分かれるか」

「う、うん。わかった」

別々に行動をするために城之内が手を離すとシャルロットは残念そうだった。

「まあ、これでいいか」

城之内は付近にあったシンプルな黒の水着を選ぶとシャルロットと分かれた場所に戻ると既にシャルロットがいた。

「あれ？早いな。もう水着選んだのか？」

「あ、ううん。ちょっとね、城之内に選んでほしいなあて」

「俺に？まあいいけどよ。あんまセンスは期待すんなよ」

二人は女性用水着売り場に足を踏み入れた。
すると

「そこのあなた」

「え？」

見知らぬ女性が城之内に話しかけきた。

「男のあなたに言ってるのよ。そこに水着、片づけといて」

「（そっぴえば前に一夏の奴が言ってたな。こういう女がいるって）
」

ISの登場以降、世界は女尊男卑の傾向があり、見知らぬ女が男に命令してくるのも珍しくないという話を城之内は一夏から聞いていた。

「知り合いや重たい物持って困ってる婆さんならまだしも、なんで見知らぬあなたの命令を聞かなきゃなんねえんだ」

「ふうん、そういうことを言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

そういつて女性客は警備員を呼ぼうとすると

「あの、このくらいでもういいでしょう？彼は僕・私の連れですか
ら」

タイミングを見計らってシャルロットが女性に話しかけた。

「あなたの男なの？躑くらいしつかりしなさいよね」

そう言った女性は水着売り場から出て行った。

「躑だとく、男を犬か何かと勘違いしてやがんのか」

「ごめんね城之内。やな思いをさせちゃって」

「別にお前が悪いわけじゃないだろ。お前やIS学園の連中を見れば女がみんなあんなんじゃないてわかるしよ（高飛車な女なら見慣れてるしな）」

「そうなんだ。じゃあ、水着を見てくれるかな」

シャルロットが城之内に水着を見せようとすると、ロケット戦士がシャルロットにこっそりと話しかけた。

それだけじゃ駄目だよ！

「えっ！？それじゃあ・・・どうすればいいの？」

マスターに本気で意識させるために、試着室の中に連れて行ってそこで直接見せちゃうんだ！

「ええっ！！！？」

ロケット戦士の爆弾発言にシャルロットは困惑する。

ここだけの話、マスターには実は強力なライバルがいるんだよ

「そ、そうなの!?!」

「そうだよ。ライバルに差を付けるためにロケットの様に一気にいくんだよ!」

ロケット戦士の言葉に誘導されたシャルロットは城之内を引っ張って更衣室に入ってしまった。

「おっ、おいシャルロット!」

「ご、ごめん。すぐ着替えるから待っててっ」

「な、なら俺は外に」

「だ、駄目!だ、大丈夫。時間はかからないから」

「時間はかからないからってっ……」

シャルロットが上着を脱ぎだしたため、背中を向けた。

「(これは……どうなるんだ?俺……というかなんでシャルロットはこんな事を……)」

城之内が混乱していると

「い、いいよ」

シャルロットが着ていたのはセパレートとワンピースの中間のような水着で、色は夏を意識した鮮やかなイエロー、更に胸元を強調する大胆なデザインになっている

「どう……かな……」

「い、いいんじゃないか」

「そう。じゃあこれにするね」

「なら先に出てるぜ」

城之内が試着室を出ると

「………何をしているんだ馬鹿者共が」

千冬と真耶がいた。

更に隣の試着室から

「じよ、城之内くん？織斑先生？山田先生？」

遊戯とラウラが出てきた。

実は城之内とシャルロットが水着売り場に着いた頃、遊戯とラウラも水着売り場にいた。

「遊戯、お前はどんなのがいいと思うのだ？」

「うーん、僕も正直どんなのがいいのかわからないんだ。ラウラはどんなのがいいと思うの」

「私もこういった物を買うの始めてで、よくわからないのだ」

遊戯は女物の水着のセンスがわからず、ラウラは軍人として育ったためにそういった知識が無く、水着選びは難航していた。

「（あれは……シャルロットと城之内）」

するとラウラの目にシャルロットが城之内を試着室に連れ込むのが映った。

「（なるほど、シャルロットは城之内にああやって意識させる気が。ならば私も！）」

「えっ？ええっ！？」

ラウラは手近な水着を持つと遊戯の手を引っ張り、更衣室に入ってしまった。

その水着を遊戯に誉められたためそれに決めて、試着室を出ようとした所だった。

「はあ、皆さんも水着を買いにですか。でも、試着室に男女が二人で入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「ごめんなさい」

「申し訳ありません」

「仰る通りです」

「すみませんでした」

その後四人は正座をして真耶の説教を聞いていた。
すると千冬が

「そこで隠れてる奴らもいいかげん出てきたらどうだ」

すると物影から一夏、セシリア、鈴の三人が出てきた。

「奇遇ですわね皆さん」

「一夏、セシリア、鈴」

「お前達も来てたのか」

「セシリアと鈴に誘われてな」

「わたくしが先に誘ったのですが、鈴さんがどうしても言いますので」

「何言ってるのよ！私が先に誘ったんじゃない！」

セシリアと鈴が口喧嘩を始め、今度は二人が説教を聞く事になった。

一方、城之内のデッキ内では

ロケット戦士

ロケット戦士がレッドアイズ、炎の剣士、ギルフォードに追い詰められていた。

「ごめんよ……あ、ああなるとは思わなかったんだ

問答無用!!

アアアアアアアアアアアアアアツ!!

遊戯達と分かれた城之内とシャルロットは、ショッピングモール内を回っていた。

マスター

どうしたんだ？炎の剣士

シャルロットにプレゼントでも買ってあげたらどうでしょう

「プレゼント？どうしてだ？」

今回のデートの記念に

「デ、デート?!?!?」

炎の剣士の言葉に城之内は顔を真っ赤にした。

「(デ、デートって、確かに遊戯達と鉢合わせるまではずっとシャルロットと二人きりだったけど、別に俺達はそういう中じゃねえし、女と一緒に行動なら、杏子と何度かあるけど、大体遊戯と本田がいるしな)」

城之内の頭は混乱していた。

マスター!男ならビシツといきましょう!

「あ、ああ」

炎の剣士の言葉で正気に戻った城之内は近くのアクセサリーショップに目を向ける。

「シャルロット、ちょっといいか」

「えっ?」

城之内はシャルロットの手を握ってアクセサリーショップに入ると一つのブレスレットを手に取った。

「これ、どう思う?」

「え?いいと思うよ」

シャルロットの言葉を聞くと城之内はブレスレットを持ってレジに

向かった。

「ほらこれ」

レジから戻った城之内はブレスレットが入ったケースをシャルロットに渡した。

「これって」

「まあ……え〜と……今回の記念にだ……」

「ええっ！いいのっ!?!?」

「あ、ああ」

シャルロットはブレスレットを受け取ると上機嫌になった。

「それともう一つ」

「もう一つ?」

「俺達だけの呼び方だったので、これからは「シャル」って呼ぶのはどうだ?」

「シャル……うん。いいよ!凄くいい!」

城之内の提案に更にシャルロットは上機嫌になり、二人はそのままIS学園に帰っていった。

第24話 海に向けて（後書き）

感想よろしくお願いします

第25話 動き出す闇（前書き）

今回は短く、次回から臨海学校に向かいます

第25話 動き出す闇

ある日の夜、千冬はある人物から連絡が来た。

『やつほー！ 私の愛しのちーちゃ
ブチッ。』

千冬は無言で連絡を切る。
そしてすぐにまた連絡が来る。

『ちよっと！ いくら何でもひどいよ、ちーちゃん！』

「黙れ、束。いつも言っているが、ちーちゃん言つな」

千冬と話をしているのは、篝の姉であり、ISの開発者の篠ノ之束である。

「まあいい。それより、お前から連絡するなんて珍しいな。何かあったのか？」

『うん。ちーちゃん、前に話してくれた武藤遊戯と城之内克也って
いう二人組がいるよね？』

「……驚いたな。お前が私と一夏と篝以外の人間に興味を持つなんてな」

実は束は自分の興味のない事には極端に冷淡で人も例外ではない。

『まあー、さすがにいつくん以外で男でISを使えらるとなるとね〜。』

でも、今回は違うんだよ。実はね、IS学園で預かって欲しい二人組がいるんだよ〜」

「わかった。確か今度の臨海学校の時に篝の専用機を持ってくるんだっただな？ その時に一緒に連れてきてくれ」

「うん、わかった。ありがとう、ちーちゃん！ ちなみに、一つ言っておくと、その二人組は専用機を持っているよ〜」

「何だと？ お前が作ったのか？」

『違うよ〜。二人がいつの間にか持っていたらしいんだよね〜』

「（武藤達と同じか……一体どうなっているんだ？）」

『それじゃあ、そろそろ切るね、ちーちゃん』

「ああ、またな」

千冬は束と連絡を切った。

とある海、そこには三つの箱が浮かんでいた。

それぞれには『雷』、『風』、『水』と刻まれていた。

すると箱が開き、中から三つの影が出てきた。

「まさか、我らがおもむくことになるとは……」

「ヒョヒョヒョ、所詮は虫という事でしょう」

「最初から俺がいけばよかつたんだよ！」

「油断をするな。奴らは今までにも何度も危機を乗り越えている。我らも本気をださねばグレート・モスとパラサイドと同じ運命となる」

「そうですね。奴らと同じ運命はお断りね」

「見ている……名も無きファラオの器よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5163x/>

IS インフィニット・ストラトス ~ ミレニアムウォー~

2012年1月4日23時53分発行